

360

510

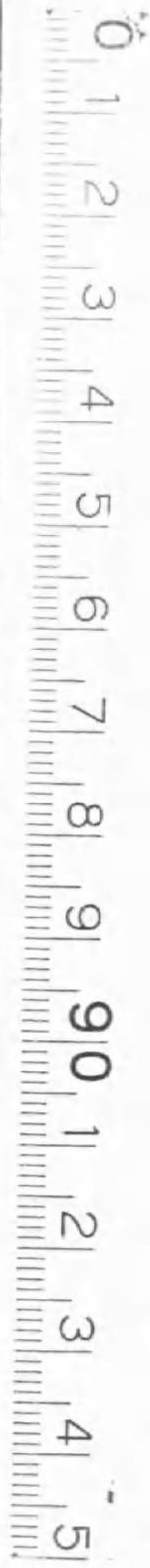
城北鄉土讀本

納本

東茨城郡北郡教育部會編纂



東茨城郡北郡教育部會



始



特217
468



東茨城郡北部教育會編纂

北鄉土讀本



東茨城郡北部教育會

讀 書 懷
古 今

昭和甲戌夏日

金峰野人題

知事阿部嘉七閣下には、公私の御用頗るお忙しい中を、特に本會の懇請を容れ、本書の爲めに題辭を賜りました。

「書を読んで古今を懷ふ」言葉は短うございますがその意味は非常に深いと考へられます。私共は、閣下のお言葉をよく味つて講學修省の途に勵み、その御誠意に酬いたいと思ひます。

個々、子の晴鐘意に關心すると思ひます。
 ひと筆へはかまます。其共、關心の言葉をもつて和して編纂者の意に
 「書き進んで古今を對し」言葉は強うござんます。此子の意は非常の類
 を容れ、本書の益もいふ程を願ひます。
 此事同諸君に關心され、公衆の晴出願を計し、中々、其の本會の意に

金納裡人殿

昭和甲辰夏日

古今
書對



古今
 續書懷

昭和甲辰夏日

金納裡人殿

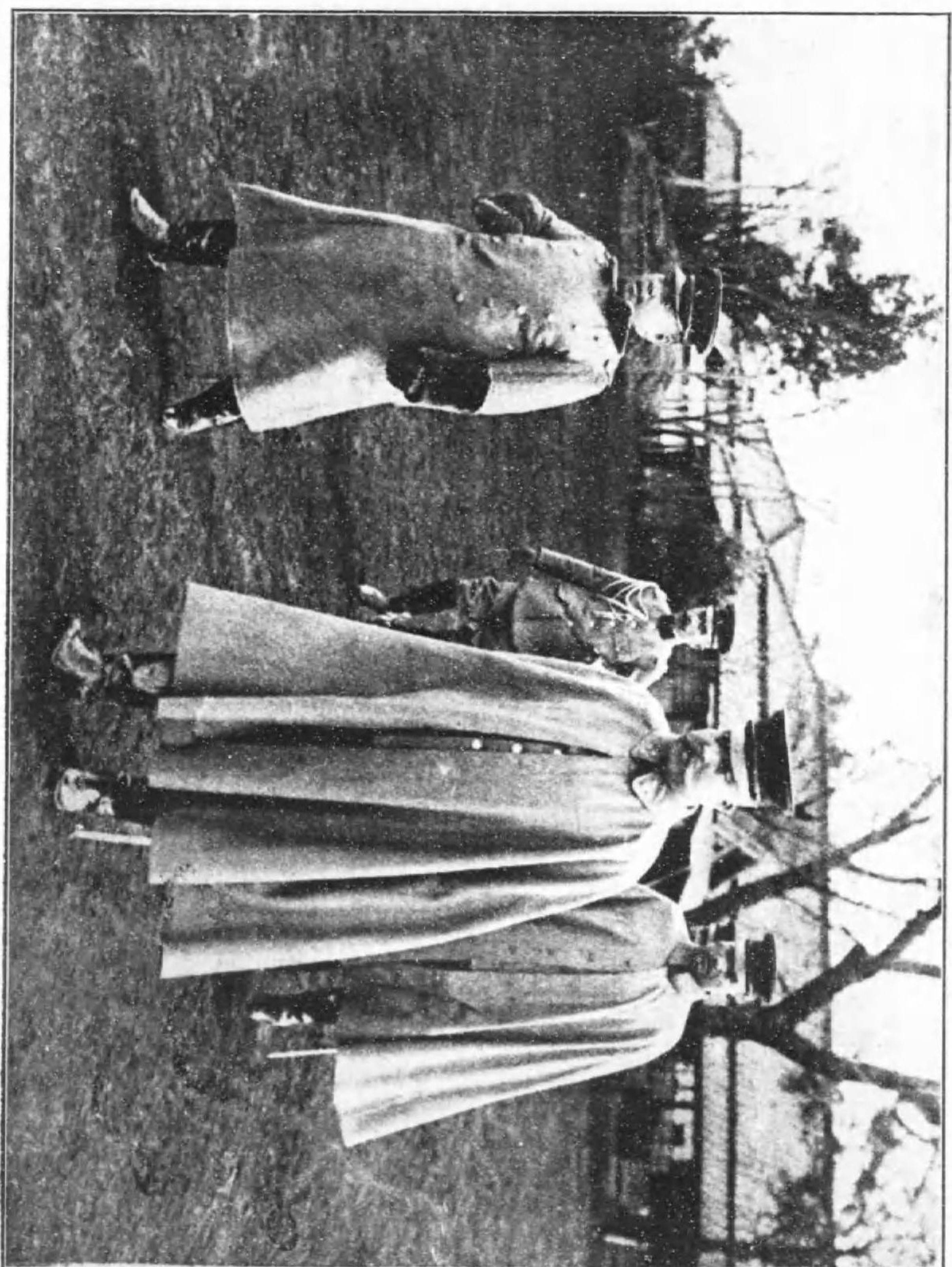


大正十三年三月 久邇宮邦彦王殿下 梨本宮
守正王殿下には陸軍將官濱野の爲め御來縣、
二十五日飯富村に於いて演習御實施の上、同
小學校に御休憩遊ばしました。
飯富村ではこの光榮に感激し、役場學校軍人
分會男女青年團はさなら全村民擧げて奉迎
の誠意を捧げました。
今飯富小學校の校庭には、兩殿下御手植の松、
年毎に縁を加へて、當年の光榮を物語つてを
ります。

飯富小學校庭を歩ませ給ふ

久邇宮殿下

梨本宮殿下



日在十。
 平時訓練之要，在於其能將此心志，
 全體貫注於訓練之中，訓練中其精神，
 必能貫注於訓練之中。
 此種訓練之要，在於其能將此心志，
 全體貫注於訓練之中，訓練中其精神，
 必能貫注於訓練之中。
 此種訓練之要，在於其能將此心志，
 全體貫注於訓練之中，訓練中其精神，
 必能貫注於訓練之中。

明治十八年三月五日

久松義興

藤本宮輝

序

東茨城郡北部一町七ヶ村は、纏つた一の郷土で、自然の景色もよいが、昔から偉い人物も多く出た所である。此地方は、人の生活に都合のよい故か、數千年前より人の住んだ跡があり、しかも習慣は質素儉約、そして文化は相當に進んで居た。神社、寺院、古墳、城址など優れたものゝ多いこと、この地方に及ぶ所はない。かうした郷土の誇りを永遠に活して行く爲に、小學校の児童や、少年青年は、つとめて此讀本に親むがよいと信ずる。

茨城縣史蹟名勝天然記念物調査會委員

茨城縣囑託 弓野國之介

序

郷土の過去を知ること、我等が何よりも先づ努めなければならぬ必要事である。過去を知り現在を解し而して將來を律してこそ初めて我等は完全に人としての生活が可能であるのである。今回郡教育會の當部會に於て北部一町七ヶ村郷土誌の出來た事は我等が過去の生活を知るに於て全く空谷の跫音であり、それだけ我等郷土人に取つては大なる光明を與へられたものである。當に兒童や生徒の讀み物として適切有效なばかりでなく、一般各家庭に必ず一本を備へ家族凡ての智識として一般化するやう望んで已まぬ次第である。

喜見育英文化功。美哉城北協和風。

水明山紫依然在。郷土興亡一卷中。

昭和九年九月 日

石塚町長 瀬谷司之介

緒言

「郷土讀本」は、最近教育思潮の歸趨よりみて、當然なかるべからざるものの一である。けれども世間なほ未、所謂郷土教育の思潮を正視するものばかりでないと同様に、「郷土讀本」に對しても二三の見解があるやうである。試みに之をみれば、或は名山を説き大河を叙し名産をあけ古社寺を紹介する等専ら案内記に類するもの、或は郷土の沿革史蹟を細叙した郷土史に似たるもの、或は民俗經濟等主として生活態様を述べるもの、若くは課題を掲げ設問を與へて兒童の學習調査の指針たらしめんとするもの等さまざまである。地域は、一府縣の廣きより一町村の狭きにわたり、内容は、古文書の集録、蒐集等に力むるもの、名家の文章を採録するもの等之れも一様でない。そもそも郷土讀本の適當なる様式はその何れによるべきか。思ふに「郷土讀本」の世に現れてより日尙淺い、ことにその公刊のものに至つてはまことに尠い。その内容形式の一ならざるもやむを得ないことであらう。今度、本會に於いて自ら揣らす、これが編纂を企て、部内の兒童生徒に讀ましむると共に、ひろく世間の批評を請ふことにした。希くは、大方有志の示教と實際使用の經驗とに依つて、修正補訂を怠らず、漸次に完璧を期したいと思ふ。これ廣く江湖有識の士の示教を待つ所以である。

昭和八年十一月 明治節の日

東茨城郡北部教育會長

鳥 光 之 介

凡例

- 一、本書は主として尋常科第五學年以上の兒童に與へて、郷土に關する正しき認識を得しめ、うるはしき情操を養はしむるを旨とし、進んで郷土、國家の愛護發展に參與する力を養はしむる資料の一とするものである。けれども又廣く青年子女の讀物としても敢えて不可なかるべく留意した。
- 一、内容は主として、常陸國誌、東茨城郡誌、各町村郷土誌に據り、必要に應じては實地を踏査し事實を照會し、或は郷土人の口碑を參考とした。
- 一、上古の史實は、多く口碑に依るのみで、原據とすべき文献に乏しい。けれども大局よりみて、あり得べきこと若しくは信じて不可なきものは、正史と背馳せざる限り力めて之れを採録した。
- 一、實際指導の際は、單に事實の附加や、語句の説明にのみとゞめることなく、或は課題として實地を調査せしめたり、或は統計をとらせたり實測をさせたり、或は歸趨を考究せしめたり、すべて之れを多方的に取扱つて頂きたい。

- 一、編纂は、各小學校に編纂委員を設けて、材料の整頓に従はしめ、更らに數次委員會を開いて調査審議をなし、終に主任徳宿克忠氏をして起稿せしめた次第である。本書の成る、一に委員並に主任者の勞である。
- 一、本書草稿成るに際して特に弓野北峽先生に閲讀を請ひ其の指教を仰ぎしは深く謝意を表する。

編纂者の言

郷土は祖先の魂の宿る所であり、わが生命のはぐくまれる搖籃であります。祖國愛といひ國家愛といふも所詮は郷土に對する愛着の情より育成されるものであります。

さても美しい哉、故郷の山河、懐しい哉、郷土の天地、山には友だち打連れてわらびを折つたあとをのこし、川には同胞携へて小鮒を釣つた淵があります。古寺院やうやく荒れてそのかみの規模復見るべからざるも、鎮守の森は神代ながらの緑をこめて神威いよ／＼高きを覺えます。畑は草ぎられ田は土返へされて實にや萬物を産みなす母とみられます。誰か故郷にそむき郷土をすてることが出来ませう。胡馬は北風にいななき、越鳥は南枝に巢作るといふ。老い來つて南天北地の身も、寢覺の夢は井筒のほどり竹馬の遊びのそれならずば、兄弟同牀の思出であります。

「郷土讀本」は郷土の歴史を説き地理を示し人物を語り自然を叙したもので兒童に對する讀物であります。編纂者自身にとつては綿々として盡きざる愛郷懐古の叙事詩であります。あゝ、山河依然たるも人既に亡く、風物昔にかはらねど父や母や今何處に在す。偏に望を囑するはわが青少年諸君のみ。見よ、祖國日本は更らに國運の飛躍を遂ぐべく君等の奮起を促しつゝあるではありませんか。

昭和八年初冬

淡山草堂の一室に於て

編纂者識

城北郷土讀本 目次

前篇

はしがき……………一

第一 郷土史談……………三

- 一 少彦名命……………二
- 二 國護のお使……………三
- 三 建借間命……………四
- 四 郷村の發達……………五
- 五 防人の歌……………六
- 六 常陸に於ける武士の興亡……………七
- 七 源義家……………八
- 八 忠烈那珂通辰……………九
- 九 頓化原合戦……………一〇
- 一〇 水戸義公德川光圀……………一一
- 二 明治維新と我が郷土……………一二

第二 郷土の社……………二六

- 一 郷社阿波山上神社……………二
- 二 藤内神社……………三
- 三 青山神社……………四
- 四 石船神社……………五
- 五 大井神社……………六
- 六 高房神社……………七
- 七 三枝祇神社……………八
- 八 鹿島神社……………九
- 九 手子后神社……………一〇
- 一〇 風隼神社……………一一
- 二 白山神社……………一二
- 三 吉田神社……………一三

第三 郷土の寺……………三九

- 三 其他の村社……………三九
- 一 大部山眞佛寺……………二〇
- 二 白雲山小松寺……………二一
- 三 佐久山薬師寺……………二二
- 四 寶幢院寶嚴寺……………二三
- 五 太古山清音寺……………二四
- 六 高根山大山寺……………二五
- 七 瑞雲山龍谷院……………二六
- 八 廢絶の寺院……………二七

第四 郷土の人々……………五

- 一 大部平太郎……………二
- 二 入野七郎次郎……………三
- 三 興野助九郎……………四
- 四 袴塚周藏……………五
- 五 鯉淵要人……………六
- 六 綿引新八郎……………七
- 七 高瀬宥仁……………八
- 八 寺門靜軒……………九
- 九 島長重……………一〇
- 一〇 生駒周藏……………一一
- 二 今瀬織部……………一二
- 三 黒澤止幾子……………一三
- 三 船橋太郎衛門……………一四
- 四 大高要介……………一五
- 五 蓮山和尚……………一六
- 六 蓮田東三……………一七
- 七 香川敬三伯……………一八
- 八 其他の人々……………一九

後篇

第一 郷土の自然……………八七

一 位置と區域……………二地勢

三 山と河……………

第二 郷土の産業……………九六

一 職業別戸數……………二土地

三 生産物……………四 特産物

五 商業……………六 漁業

第三 郷土の人口……………一〇三

一 各町村別現住人口……………二 出寄留及び海外移住

三 年齢別現住人口……………

第四 郷土の生活……………一一〇

一 子供の生活……………二 教育、教化

第五 郷土の政治……………一二七

一 沿革……………二 町村一覽

三 町村の自治……………四 町村にある地方官署

五 明治維新の志士……………六 明治以後戦病死殉職の軍人

七 忠魂碑……………

附録

系圖……………年表

各町村自治機關職員一覽……………

同 教育機關教化團體職員一覽……………

同 官公署公務員一覽……………

城北郷土讀本

東茨城郡北部教育會編纂

前篇

はしがき

懐しい郷土

關東地方の地圖を披(ひら)けてみなさい。栃木縣那須山のほとりから南へ流れ、東に折れてわが茨城縣に入り、水戸市の北を過ぎて、終(つひ)に太平洋に注ぐ川があります。これがあの那珂川です。その那珂川の右に沿(そ)うた一町七ヶ村、これこそ、皆さんを生(な)み、皆さんを育て、やがては皆さんの活動を期待(たの)してゐる懐しい郷土であります。思へば、あの山、この川、さては後の雑木林(ざつぼくりん)、前の稻田(いな)、一木一草にも皆さ

はしがき

榮える郷土

んの祖先の努力が残つて居り、一握にぎりの土くれ、一跨またの小川にも皆さんの御両親の苦心が宿つてをります。鎮守の森には、昔こひしい神話傳説があり、廣い田圃たんぼには、開墾耕作の苦心の跡が見られます。

皆さんは、この郷土をば皆様の御両親から承つけつぎました。けれどもこれを後の人に傳へるには、もつとく立派な郷土とせねばなりません。懐しい郷土をば、更らに榮える郷土といたしませう。美しい山河をば、もつと富める山河といたしませう。さて、誰がさうするか、皆様です。みんな皆様の力です。

郷土讀本

この「郷土讀本」は、皆様に郷土の歴史を語ります。地方の地理を示します。併し單に過去かこを探り現在を知るためのみではありません。村のお寺の鐘かねの音は、撞つく人の力によつて強くも弱くも響ひびきます。皆さんは、この本をばよく讀みよく用ひて、更らによき郷土をつくる力を養つて下さい。一冊の郷土讀本は、さうなつてはじめて價値かちを生ずるのであります。

第一 郷土史談

一 少彦名命

神代

遠い昔です。神代のことです。

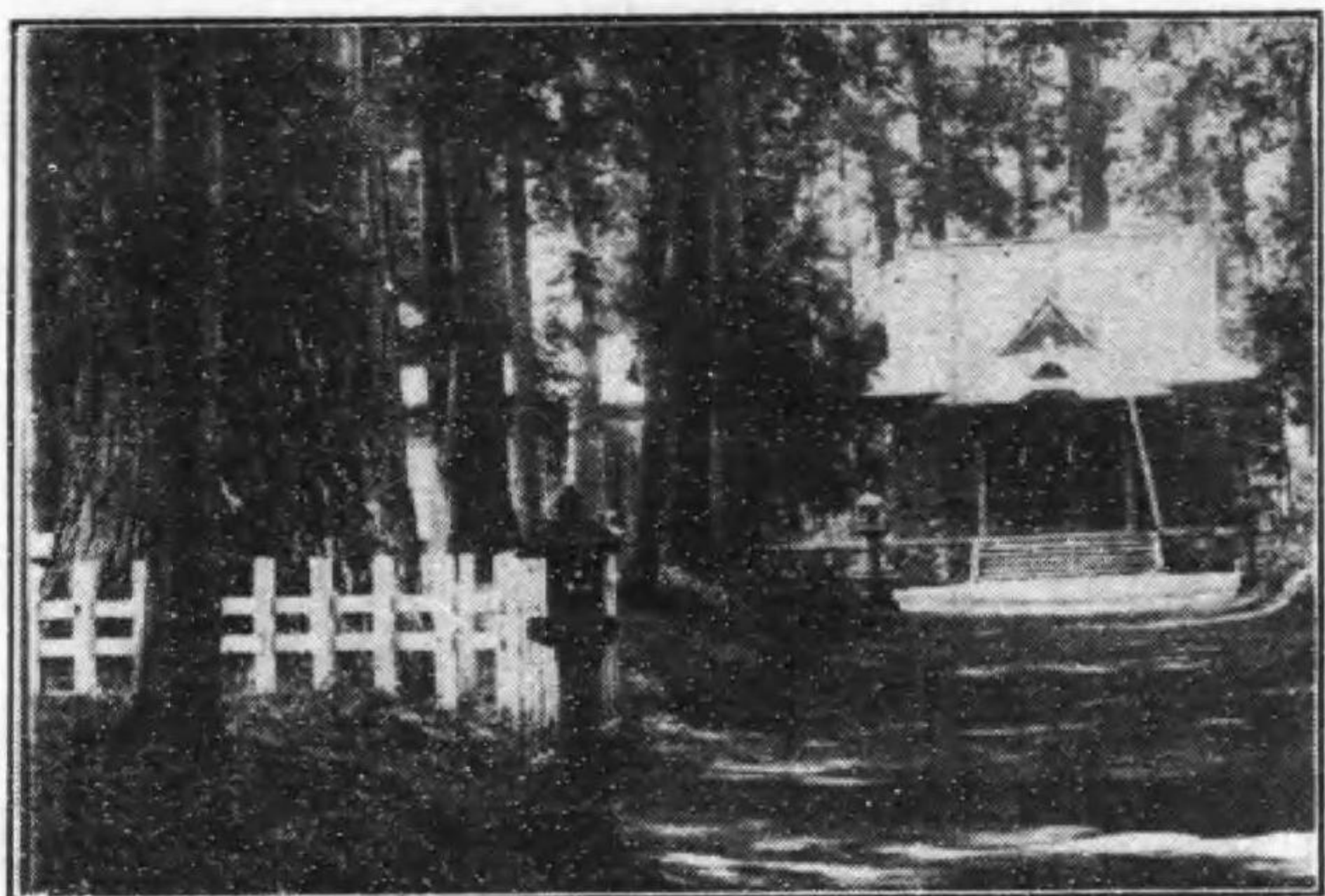
御手に粟の穂をお持ちになつた神さまが、とある大杉のほとりにお立ちになりました。神々しいお姿は、小暗い杉森の暗を照して、四邊よたへが明くなりました。土地の人々は、惶おそと愕おどろとに打たれながらも、お優やさいお姿にひかされて、お傍そば近く集りました。

少彦名命

神様は、御名を少彦名命と申します。大國主命とお力を協あせられて、日本中をお巡りになり、人々に病をなほすことや田畑を耕すことなどを、お教へになつていらつしやつたのです。ちやうどこの時、命は大國主命と御相談なされて、お二人途みちを別々にしてはるく、東の國々をお巡りになり、この大杉のほとりで、お會ひにならうとお約束なされ、今こゝへいらつしやつたのです。

待つはつらいもの

阿波山上神社



澤山村 阿波山上神社

とです。

命は、集つて来た人々に、粟の作り方や、病を治す術などをお教へになりつゝ、大國主命をお待ちなさいましたが、どうしたことか大國主命のお姿はなかくお見えになりません。命は待ちどほしくなつて、あゝ、待つはつらいものだ。」と思はず獨言をおつしやいました。皆さん。行つて御覽なさい。この大杉は今もなほ澤山村大字阿波山の鎮守の社の境内にあります。鎮守の社は即ち少彦名命をお祀り申した阿波山上神社であります。昔、あの邊一帶を阿波郷と言つたのは、命の御神徳で粟を作るこ

とが早くから盛になつた爲だといふことが早くから盛になつた爲だといふことを嫌ひます。

二 國讓のお使

建御雷命と天鳥船命

大國主命が、出雲地方を平定なされて、威勢四隣に及ぶ者がなかつた時、天照大神から國讓のお使をおよこしになることになりました。その時御使としてえらばれたのは、建御雷命と天鳥船命のお二人です。やがてお二人は、出雲へお下りになり、

「大神の勅には、此の葦原の中つ國は皇孫の治す國である。」とのことである。快くこの國をたてまつり給ふかどうか。

命は答へて

「私はもとよりいなみ奉る心はありません。併し念の爲、わが子事代主と相談してからお答へ申しませう。」

「事代主は何處へ行かれたか。」

と天鳥船命がおたつねになると、美保崎といふ處へ漁りに行かれたと

國讓の申言

の事です。

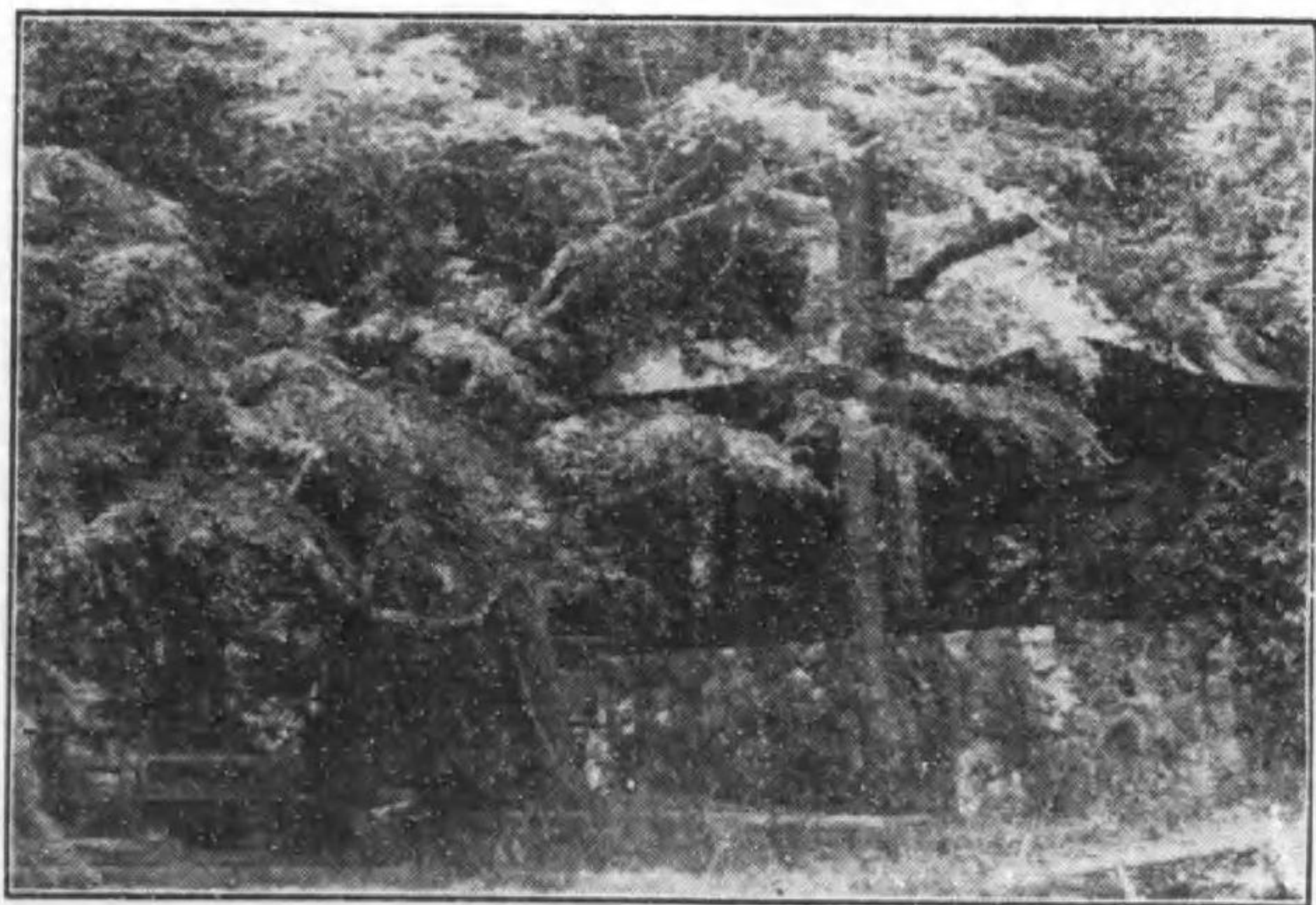
「よし、それなら」

と天鳥船命は、とぶが如くに美保崎へお出でになり、事代主をお連れになりました。事代主はお父様から、事の由をおききになり、

「それは勿体ないお話です。仰のまゝにこの國をたてまつることがよろしいでせう。」

それで大國主命も安心して、神勅のとほりこの國をたてまつることになったのです。

その後、お二人の神様は、國中をお巡りになつて、いろくお盡になりました。我が郷土にも二神の尊い遺



石船神社

石船神社

跡が残つてをります。即ち西郷村の一部から岩船村の一部へかけて古くは鹿島郷といひ、建御雷命をお祀した鹿島神社がいくつもあり、岩船村の石船神社は、天鳥船命を奉祀した由緒のある古い社であります。

三 建借間命

神武天皇以後、大和地方はよく治りましたが、遠い國々は歳を経るにつれて少々亂れてきました。

それで第十代崇神天皇の御代には、建借間命といふお方が、勅命に依つて常陸地方の賊共をお討ちになり、この地方を平定なさいました。それが爲め第十三代成務天皇の御代には、わが常陸地方に、新治、筑波、那賀、久自、高と五ツの國を置かれ、それく國造といふ役をお定めになりました。

この時、はじめて那賀國造となられたお方は、建借間命の御子孫ださうで、那賀といつたのは、今の那珂川の右左の地域に當ります。

飯富村の大井神社は、この建借間命をお祀した社で、渡里村にある愛

大井神社

宕山といふ小高い丘は、命の墳墓であるとのことです。社號を大井といふのは、その昔命が地方人民のために、大きな井をいくつも掘つて灌漑の便を圖つて下されたといふことによるとのことです。

四 郷村の發達

その後、應神天皇の御代に茨城國造がおかれ、前の五の國造と合せて六國造となり、すべてこれらを「常道」と呼ぶやうになりました。それが文武天皇の御代に「常陸守」といふ役が設けられてこの地方を治めることになつてから「常陸國」といふ名が定まつたのであります。

これより先、孝徳天皇の大化二年に、これまでの國造を廢し

六國造

常陸國



て評督といふ役を置くことになり、それが爲め那賀評といふ名稱も出て來ましたが、文武天皇の大寶二年に評を改めて郡となし、その下に里をおくことになりました。しかし間もなく聖武天皇の神龜元年に郷の制が立てられ、那賀郡二十二郷の地域が定められました。後、清和天皇の頃から那珂郡と呼ぶことになりました。

この制度は永く續きましたが、中世地方の政治が亂れて武家が起る頃には、那珂郡の地が吉田、那珂東、那珂西の三郡に分れました。然るに後陽成天皇の文祿三年、石田三成が豊臣秀吉の命に依り當國の檢地を行つた際に、那珂川以南の地を茨城郡に屬せしめ、以北を那珂郡とすることになりました。

明治十一年、郡の西部を割いて西茨城郡を置き、東部を東茨城郡と呼ぶことになりました。

郷は、その後、村の制行れるに及びやうやく廢れ、明治二十二年には、新に町村制が實施せられ、從來の村は大字としてその名残をとめるや

那珂郡

東茨城郡

村—大字

うになりました。

五 防人の歌

今の青年が兵役に服して護國の任に就くと同様に、奈良朝時代の地方青年は、召されて兵士となり遠く筑紫の果まで赴いて、國防の任に當りました。それらの兵士をば當時防人といひました。

時はちやうど孝謙天皇の天平勝寶七年春二月十四日、我が常陸の防人は、他の東國の防人達と一緒に、領使に率ゐられ、今の大阪の港からはる／＼筑紫へ立たうとしました。波打際には、領布振りながら行くを勵ます人々、船の上には、箆をたゝいて別れを告ぐる兵士共、勇しい情景は昔も今と變りはありません。その際、引率の領使が防人達の詠んだ和歌をまとめて朝廷に上りました。それが萬葉集に收められて、永く地方青年の意氣を物語つて居ります。

九首の中に、我が郷土人大舎部千文の歌が二首載せられてあります。千文は那珂の人とのみ郷名のないのが残念です。二首の一に

常陸青年の意氣

緞ふり鹿島の神を祈りつゝ

皇御軍にわれは來にしを

「軍の門出に、武神鹿島の神に祈を捧げ、必ず赫赫たる功名手柄を立て得るやうに」と心に誓つた自分である。人に後れをとるやうなことをして、どうしておめ／＼歸られやうか。」と自ら勵ます常陸青年の燃えるやうな精神があり／＼とみえるではありませんか。

六 常陸に於ける武士の興亡

平安朝の頃、藤原氏が權を専らにして政治に怠り、地方には武士が起つて國々の制度がやうやく紊れました。

その頃、常陸の武士としてまつ著れたのは、桓武平民の一族である大掾氏であります。大掾氏は平國香以後代々常陸の大掾に任ぜられてゐた爲め、國府のあつた今の石岡を中心として、一族常南の地に榮え勢漸く北に進んで、崇徳天皇の頃にはその家臣鈴木五郎高郷といふ者が今の澤山村に居つたといふことであります。

大掾氏

佐竹氏

少しおくれて、今の久慈郡には佐竹氏が起りました。佐竹氏は新羅三郎義光の子孫で、代々常北の地に雄視し、一時は源頼朝にさへ反抗したことがあります。戦國争亂の頃、わが郷土に居つた、大山、石塚、藤井、古内、高久の諸氏は、皆この佐竹氏の一族支流でございます。

那珂氏—江戸氏

又別に、藤原秀郷の一流に那珂氏を名乗る者がありました。はじめ那珂東に住み尋いて那珂西に移り、那珂通辰官軍に屬して佐竹氏の爲めに自殺したけれども、一子通泰は今の那珂郡戸多村下江戸に住して江戸氏の祖となりました。江戸氏は後、東茨城郡河和田に移り、更らに大掾氏を追つて水戸城を奪つたけれども、こゝに居ること七代百六十餘年にして佐竹氏の爲に滅されました。

佐竹氏は、源昌義以來久慈郡に雄視して代々その力を伸べ、一族を常北各地に分封して羽翼となし、天正十八年義宣に至り、豊臣秀吉の小田原攻に際し、自ら往いて秀吉に謁し、遂に常陸諸族の統領となりました。次いで兵を發して水戸城を攻陥し、更らに府中を襲うて大掾氏を亡し、

徳川氏

翌年水戸城に移つて天下六大名の一に數へられるやうになりましたが、在城僅か十三年徳川氏のために忌まれて秋田に移されました。時に慶長七年五月であります。

かくて我が地方は、徳川水戸家の治下となり、明治維新に及んだのであります。

七 源義家

義家常陸を通る

白河天皇の永保三年秋の頃、奥州の地再び亂れて騒しき由聞えたので、折柄陸奥守として任に就くべく東海道を下りつゝ、あつた源義家は、しきりに旅程を急いでやうやく我が郷土に近い今の西茨城郡大橋の地に着きました。

この地に軍を駐めること二日、その間義家は四邊の景勝を賞し、士卒は山狩、相撲などに興がつて行軍のつれづれを慰めてをりました。

その日、義家は僅かのお供をつれて、今の石船神社近くの秋色を探りつゝ、居るところへ、三四人の村人があわたくしく駈けつけて、

「あはれ、八幡大將軍の御威勢で、村にあだなす怪獸の災を除き給はゞ、我等永劫の幸」

と息はづませて申上げたので、

「怪獸の災と。してそはいかなる」

と訊ねもはてぬに、

「あれ〜、今日も彼所に——」

村人の指す彼方を見ると、やゝはなれた彼方の谷間、水の邊に、踞つてゐる姿こそ、虎にもあらず熊とも見えず、ざりとて狐狼の類とも覚えぬ、いふとほりいかにも怪獸と見受けました。義家自らするは大人氣ないとも思ひましたが、家來に命じて仕損じさせるもかあいさうと思ひ、弓取りなほして立ち上りました。弓は五人張、矢は十五伏、満月の如く引き絞つて、ひやうと放てば過たず、かの怪獸は聲をも得立てずそのまゝ、その場にたふれました。家來の者、村人を先立て、駈けつけてみると、こは如何に、獸と見えたる大きな石に、矢の根は深く喰ひ込んで、石は三

石舟の矢の根石

又またに裂けてゐました。これを見た村人達は、粗忽そとつを申上げた罪も忘れて、さてもおそろしき將軍の弓勢きりかなと感嘆すれば、義家も深くは咎とがめずそのまゝ、大橋の陣へ引上げました。

この石、今も昔の姿を改めず、石船川のほとりに「矢の根石」の名を負うて、三又の裂目そのまゝに残つて居ります。

かくて義家は、木葉下、又熊を過ぎて渡里に赴き、一盛長者の屋敷に泊つて、その歡待くわんたいをうけました。その際長者は、別に人を遣して、義家の麾下の將士を藤井の原で勞はたらひました。今の十萬原はその跡ださうです。

藤内神社

やがて義家は、旌旗八旒しやうきを今の八本はちほんに樹て並べて軍勢を張り、藤内神社に參拜して戰勝を祈りました。そして社前の藤枝を手折つて采配さいはいに代へ、武者振勇ましく全軍出發の命を下し、石原といふ所へ來かゝると、白鳩一羽、パタ〜と音たて、彼方に飛行きました。義家はそれを見送りながら

「彼方の里の村の名如何に」

と問へば、家來の一人が、

「勝見澤と申し候ふ。」

と答へました。義家之れをきくにつこと笑ひ、

「戦の門出に、勝見澤とか。さては幸先よきことぞ。誰かある。その村をば見て参れ。」

と下知すれば、「心得たり」と、鎌倉權五郎景政軍騎鞭を擧げて勝見澤に向ひました。今、勝見澤に鎌倉坂と呼ぶ字名のあるのはこの時の名残であります。

鎌倉坂

八 忠烈那珂通辰

後醍醐天皇の延元元年、賊足利尊氏は、去年の十二月征討の官軍新田義貞を箱根竹下に破り、明けて正月早くも鎌倉を發して西上する由聞えたので、京畿、海道の民草は風なきに戦いて、生きた心地もありません。かねて奥州の鎮であつた北畠顯家は、かくときくや軍勢を催して尊氏の後を追ひ西上することになりました。この時、太田城主佐竹貞義

佐竹氏尊氏に
應ず

は、かねて心を尊氏に通じてゐた爲め、北畠軍を撃つてその恩賞に預らんものと、手兵を以つて官軍をば今の多賀郡麩の原のほとりに迎撃ち

ました。官軍は思ひもかけぬ要撃に陣立をなほして戦つてをると、俄かに見なれぬ軍勢一手、横合より現れ出て、佐竹の軍へ斬り込みました。賊軍は不意の加勢に氣を吞まれ散々に敗北して逃げ去りました。

時に顯家の本陣は、今の助

川にありました。様子をきいて奇特に思ひ、さて、何れの勢ぞと問はせたところ、一手の中より、卯花絨の鎧着た武將一人、つゝましく進み出て、「某こそは、當國那珂西の城主那珂彦五郎通辰と申す者。この度御上



麩の原の合戦要圖

那珂西城主那
珂通辰

洛の北畠殿を沮む者ありと承り、聊か微力を致したるまでのこと、お尋ねに預りて却つてお恥しき次第。」

と答へました。少しもその功を誇る様子がありません。顯家その忠烈に感じ、望むがまゝに己が陣に加へ、行々賊を破つて、一路京都に向ひました。時は如月春未だ早く、寒風枯葉を捲くけれど、常陸の青年はかくの如くにして起つたのであります。

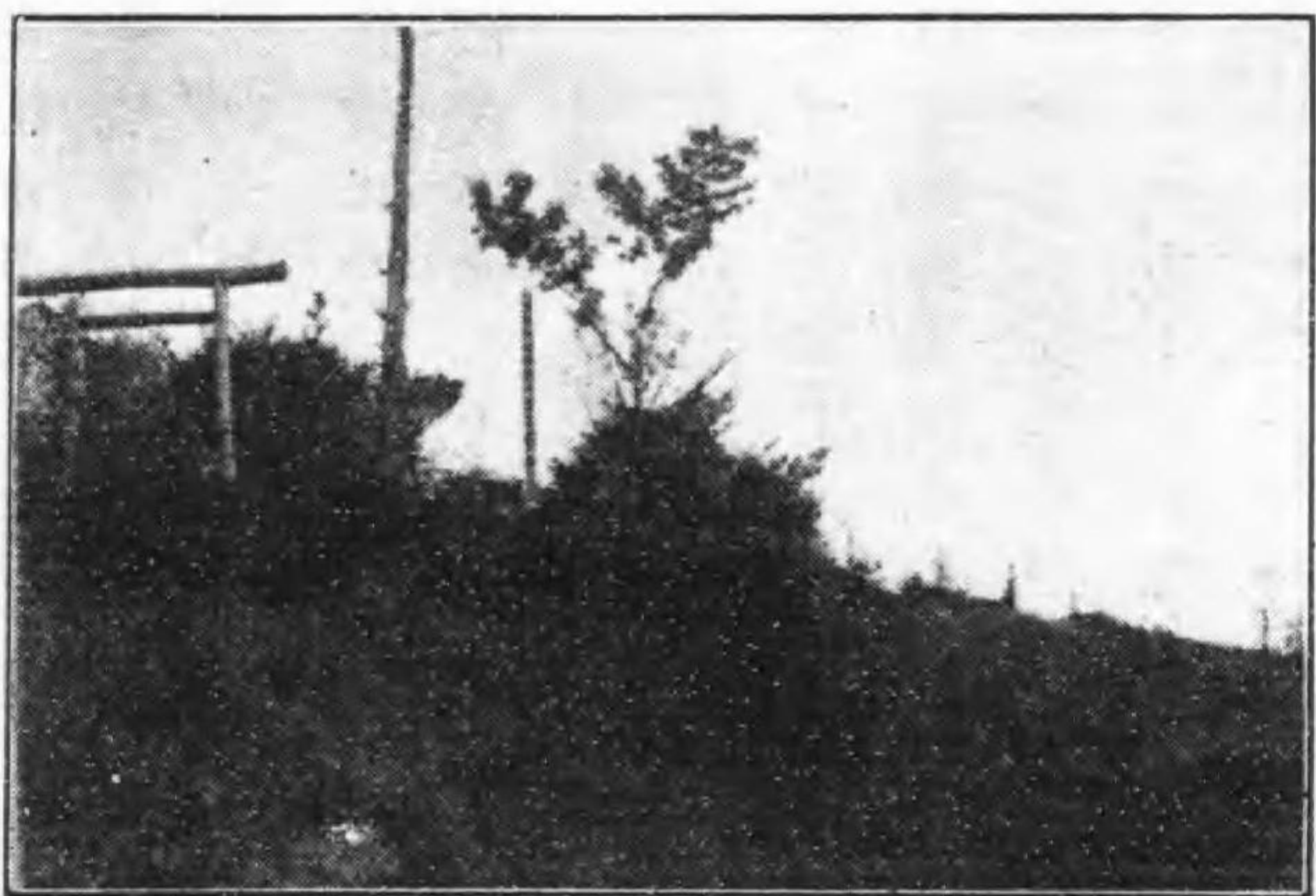
天皇は、通辰の功を聞召され、勅して菊桐の旗一旒を賜りその誠忠をおほめになりました。通辰は今更のごと天恩のありがたきに感じ、京都回復の官軍に屬して只管忠勤を勵みました。尊氏西海へ落ちて、顯家再び陸奥へ下るに及び、自分も常陸へ歸り那珂西城に據つて、賊將佐竹貞義に備へました。あはれ菊桐御紋章の旗一ながれ、那珂西城の木間に懸るをみては、如何に我が郷土青年の胸のおのゝいたことでありませうか。その時、瓜連城には、楠木正成の旨を受けて當國に下つたその一族正家が居りました。互に相應じて常陸の勤王軍の雄であり

天皇通辰の忠功をおほめになる

菊桐の御旗那珂西城にひるがへる

ました。

通辰瓜連城を救うた



那珂西城西城の景

かくと聞くや佐竹貞義は、年の十月、未だ霜の薄きに乗じて、那珂西城を襲ひましたが、もろくも破れて貞義は命からしく逃げ歸つたといふこととあります。越えて十二月、その子義敦は、父の失敗を償んとて精兵一萬騎を率ゐ、瓜連城に攻め向ひました。正家は之れを久慈川の河原に迎撃しましたが、戦利あらず引き退き、瓜連城は遂に敵の重圍に落ちました。通辰之れを聞いて、一大事とばかり、急ぎ駆け付けて正家を助け、屢々賊を打ち破りまして、と新手を加へて攻め立てるうち、城

つひに破れて
一族難に殉し
た

中に内應するものが出来た爲め、惜しくも城遂に陥つて、正家は遠く陸奥に走りましました。通辰は踏み止つて孤軍奮闘しましたけれど、雨の如き矢を浴びて力つき、久慈郡増井の正宗寺境内で自殺しました。一族四十三人、何れも枕を並べて忠義の鬼となりました。あゝ、孤忠回天の志遂に伸びず、菊桐の御旗空しく地に委して、唯々北風の荒るゝがまゝに任せしぞ恨みなる。

九 頓化原合戦

岩船村大字北方、諏訪神社附近を頓化原といひます。天正の昔、この地で大山城主大山因幡守常義が、石塚城主石塚越後守義衡、小場城主小場大炊助義宗の聯合軍と戦つたことがありました。

そも、この三家は、何れも太田城主佐竹氏の支流で、本宗佐竹氏がその勢力を水戸方面に伸さうとするその藩屏として、それゝの地を與へられてありながら、つまらぬこととて、見苦しい一族間の戦をすることになつたのです。

小田部孫九郎

事の起りは、初め小場氏に男子出生の祝があつた時、大山氏は祝の使として家臣小田部孫九郎を遣しました。然るに間もなくその子は病に罹つて亡くなりました。小場氏は悲嘆の餘り、これは祝の使に不吉な名の者が來た爲か」と大山氏を恨んでをると、悔みの使として再び孫九郎がまゐりました。小場氏は重ねゝの事に深く大山氏を憤りました。亡くなつた子の母は即ち石塚氏の女であります。それ故この兩家は遂に相結んで、この恨を晴さうと考へることになりました。

大山氏石塚を
攻めた

時は天正三年八月十日、小場義宗は手勢を率ゐて石塚城に入り、大山城攻撃の手筈を定めました。かくと聞くや大山常義は、後れはせじと精兵五百騎を以つて南に向ひ、ひた押しに石塚城に迫りました。城兵も備を固めて向ひ合つた爲め、大山勢の攻撃もその功なく、勝敗決せずして遂に日暮に及び、一先大山に引き上げました。

石塚氏小場氏
聯合して大山
城を夜襲しよ
うとした

夜になると石塚義衡は、小場義宗におのが勢四百を與へて、大山城に夜襲をさせることにしました。義宗はかくてひそかに、行人塚より春

頓化原の夜戦

園を経て、高久に出てやがて頓化原へさしかゝりました。夏の夜は早くも更けて、十日の月は諏訪神社の森に傾き、物凄いはかりであります。大山氏は、敵の夜襲を早くも知り、選りに選つたる勇士をば、土丸の砦、大興寺境内に潜めて、はや来いとばかりに待構へました。かくとも知らぬ石塚勢は、たゞ大山へとのみ急いだ爲め、遂に腹背に敵をうけ、陣立をなほす暇もなく、眞向の敵、横合の敵、さては後に迫る大山勢のため、散々に斬り立てられ、名ある勇士の討たる、者數を知らず、遂に算を亂して逃げ去りました。八月の夜、たちまち明けて、頓化原の一帶、血汐の花を咲かせました。

然るにこの事、早くも本家佐竹氏に聞え、理由もなき私闘の爲めに、可惜幾多の勇士を亡くした罪を責められたといふことであります。

一〇 水戸義公德川光圀

水戸藩主徳川光圀は、屢々領内を巡つて民情を視察したり社寺に参詣したりしました。

青山神社

ちやうど元祿七年秋八月、この頃光圀は既に西山へ隱栖後でありますので、僅かの供をつれて、古内清音寺へ詣でました。途中青山神社のほとりて

松かへておなじ緑の青山を

嶺のしぐれの染めやつくらむ

清音寺

清音寺では、光圀の來訪をこの上ない名譽として、寺院相傳の名茶をば、溪流の清きに煎じてさゝげました。名茶といふのは、寺の開山覆庵和尚が、そのかみ支那から持ち歸つた茶の實を播いたといふ由來のあるものです。公は深くその風味を賞し、「初梅」といふ名を與へ、廣く村人にも播種せしめて、飲料に供せしむべく諭されたといふことであります。公の「大古山清音禪寺に遊ぶ」といふ詩のうち

流を掲ぐれば清音あり 山を指せば太古に似たり

覆庵洪基を開き 法雲滋雨と降る

といふ句があります。

安渡川

それから公は、下古内に出て、安渡川(藤井川の支流)で鮎狩をされました。川は絶壁の下を、岩に激しては渦をまき、崖に懸つては瀧となりつゝ、東へ流れます。こゝを今「龍潭淵」といふのは、公の命名したものださうで、今も「義公の腰掛石」といふのが残つて居ります。

上坪大森氏の藤

越えて元祿十年、公は御前山からの歸途、上坪の大山守大森守吉の家に立ち寄りしました。その際公は、庭前の藤の木をみて、「この藤の花の盛を見たものだ。來春は花の便をするやうに」といつて行かれました。明くれば元祿十一年四月十四日、大森家の主人は、「ちやうど見頃で御座いますから」と申上げました。公は「折角の申越し、花におくれては」と翌十五日、大森邸に來て満開の藤花を賞し、その夜は石塚金剛院(今はない)に泊りました。翌十六日には、水戸から文學の家來を招き、心ゆくまで藤花を賞しました。そして主人親子三人に對し、藤に因んで藤左衛門、藤十郎、藤八の名を下し、家の名をば藤本と呼ぶことに命じたといふことです。

その後約百三十年、天保四年の頃、時の藩主烈公齊昭も藤本邸に臨み、そのかみの幹はすでに朽ちたれど、若枝のよく伸びたのを見て

咲く藤の花なきころにきてみれば

めぐみのもとにあるぞ樂しき

と詠んで時の主人に與へたといふことであります。

御前山から相川

その年(即ち元祿十一年)秋八月三日、義公は更らに御前山に登つて心飽くまで秋色を探り、山の下から船を那珂川に泛べて長倉に上りました。翌日は上伊勢畑の相川(まがひ)に遊び、こゝでも川狩をしたといふことであります。

神社や寺を修理保護

この外、義公が大井神社、白山神社、藤内神社の社殿を修理したり、青山神社、手子后神社の社號を正しきに改めしめたり、眞佛寺、薬師寺、小松寺、寶幢院等の維持再興を圖つたり、高久鹿島神社の社寶、惡路王の頭形を修理したり、高野(今の錫高野)下伊勢畑、小勝、鹽子へ錫鑛山を開いたりしたところなどは、かくれない事實であります。

産業をおこす

徳川幕府

一一 明治維新と我が郷土

徳川家康が征夷大將軍に任ぜられて、幕府を江戸に開いてからは、紫
葵しげるがまゝに、國民唯々將軍の勢にのみなびいて、朝廷の尊を仰ぐ
者、尠い有様でありました。

水戸藩の風

けれども、我が水戸藩は、藩主頼房、光圀以來、何れも國体を明にし人心
を正すことを旨として、家は幕府の親藩でありながら、義は皇室の臣子
たるを忘れませんでした。それ故、家臣はさらなり領民に至るまで、偏
に朝廷の尊を仰ぎ、苟にも大義名分を忘れるやうなことはありません
でした。

水戸領民の尊
王心

されば弘化、嘉永の頃、時の藩主烈公齊昭が、幕府に罪せられ、續いて外
交の事起つて、尊王攘夷の説が天下に行れることになる、と、水戸藩士民
は、何れも身を忘れ家を出て、國事に盡しました。わけて我が郷土の
人々は、或は江戸に出て、或は京都に上つて、それ／＼同志の人々と力を
協せて、素志を訴へる者もあり、政治を論ずる者もあり、遂には大事を企

王政復古

て、皇室の御光を天下に洽からしめやうとする者さへありました。
それらの人々の中には、農民もあり、僧侶もあり、神職もあり、學者もあり、
さてはかよわい婦人もありました。そしてあらゆる難儀を凌ぎ困苦
に堪え、幾度か囚れの身となり中には獄屋のうちで命を殞した者もあ
ります。或はまたやむにやまれぬ雄心は遂に戰場を駆けめぐつて勇
しい討死をとげた者もあります。或はまた孤軍陣を備へて敵圍を脱
し、風雪を犯し、險難を躡つて一意京都へと志し、遂に北陸の風冷き敦賀
の雪と消えた者もあります。中にはまた不思議の命をながらへて郷
里に歸り明治の聖世を拜した者もあります。
そも／＼王政古に復して明治の聖世を仰ぐやうになつたのは、上に
孝明、明治の聖天子ましまし、下に賢才達徳の良臣があつて、補翼しま
らせたに依ること、は勿論であります。更らにそのかげに幾多忠烈無
名の志士があつて、家を忘れ身を省みず、ひたすらに我が皇國の正しき
姿にかへさんと心を砕いたことを忘れてはなりません。

明治天皇御製 あかつきの寝ざめくに思ふかな國に盡し人のいさをを

第二郷土の社

鎮守の社

皆さん。皆さんの村々には、それ／＼鎮守のお社があるでせう。鎮守のお社は、何れも皆さんの遠い祖先が、森を伐り地を拓いて村をおこすと同時に、その土地若くはその人達に縁ある神を祀つて村の鎮めりの守りと崇めたものであります。それ故に神社創祀の由來を調べると、郷土發達の起原が略々わかります。

鎮守の崇敬

私共の祖先は、朝は鎮守の森にひびく太鼓の音に野に出て、夕は朧に歸る鴉の群と共に家路へ急ぎました。月の朔日十五日に鎮守の社にぬかづかぬ者もなく、元朝節分の參拜にはことさら早きを競ひました。田植終れば早苗振の祭、刈上げすめば新嘗、獻穀の儀を怠ることがありません。他所に旅立つ者は、社前に親く前途の無事を祈り、事果て、郷に入る者は、まつみ社に跪いてその由を告げるを例とします。出生も

之れに報じ、婚嫁も之れに告げました。まして戦の門出、凱旋の折など、社頭に集ふ村人たちの感激に輝く面目、今もなほ眼のあたり見るやうであります。

この風、今もなほ變ることのないのは皆様の知つての通であります。創建に時代の相違があり、規模にそれ／＼の別がありましても、私共の捧げる真心には少しもちがひありません。

一 郷社 阿波山上神社（式内）

降木明神

澤山村大字阿波山に鎮座してあります。文武天皇の大寶元年、少彥名命降臨の靈地たるの由を以つて社殿を創祀しました。郷土地に於ける最も古き社であります。古くは降木明神とも號しました。

光孝天皇の仁和二年には從五位上を授くとの仰せがあり、醍醐天皇の延喜年間には常陸二十八社のうちへ加へされられ、明治のはじめ郷社に列せられました。

佐竹義舜戰勝をこの社に祈る

昔、太田城主佐竹義舜は、奸臣の爲めにその城を追はれ、孫根城（今、御城といふ所）

がそのあ)へ来て居りましたが、戦勝をこの社に祈り遂に奸臣を滅して、目出度太田の本城へ歸ることが出来ました。その神徳に感じて佐竹氏はこの社の氏子の習慣通り、正月に門松を飾ることを遠慮したといふことです。

境内は、一ノ鳥居から本殿まで約二百米、老杉巨楡立ち竝んで神々しい神域であります。馬場の中程左手に、玉垣を廻し注連を張つた大杉があります。これが即ち祭神降臨の神木であります。

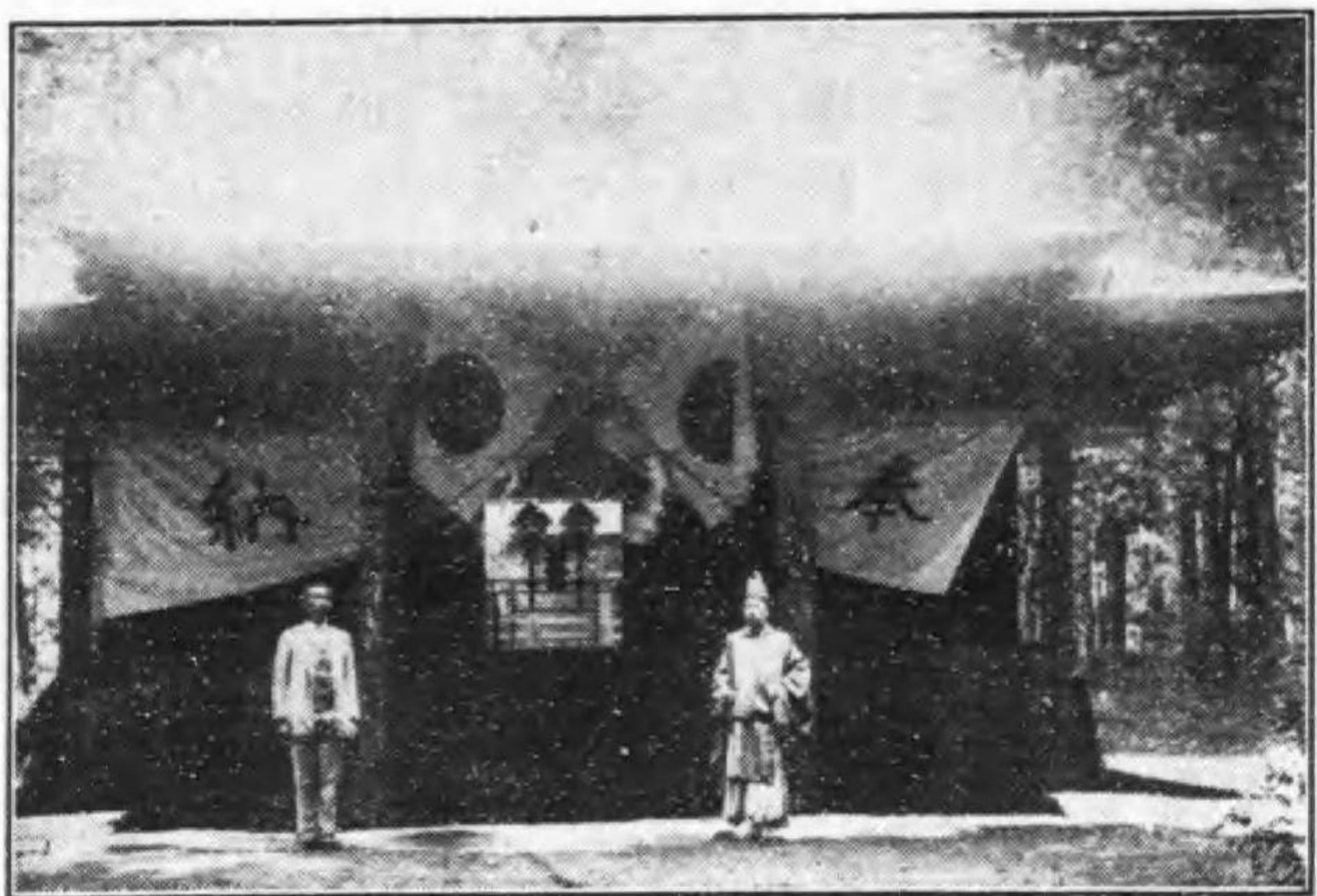
二 村社 藤内神社(式内)

飯富村大字藤井にあります。元正天皇の養老五年の創建で、祭神は經津主命であります。馬場先に神の池があり、紫の藤が一本、美しい影を水面にうつしてゐます。昔永保年間源義家が奥州征伐の途、この社に朝敵退散の祈をこめ、この藤の一枝を鞭として、馬上豊に軍を進め、士氣大に振つたといふことです。

三 村社 青山神社(式内)

五十猛命

西郷村大字と青山に鎮座してあります。光仁天皇の寶龜三年の創



延喜式内青山神社々殿

立で、祭神は五十猛命であります。五十猛命は、素盞鳴尊の御子で、御父の尊と海を渡つて、今の朝鮮の地にお出でになり、そして色々の木の苗を御持歸りになり、それを内地の國々へお植ゑなされ、我が日本を緑の國となされたと申すことです。青山神社の社號もかういふことから出たのでありませう。

清和天皇の貞觀二年には従五位下を授けられ、光孝天皇の仁和二年には従五位上にすゝめられました。杉の木立の神々しい境内で、四邊には

古墳が數多くあります。

天鳥船命

四 村社 石船神社（式内）

岩船村大字岩船に鎮座してあります。創建年代は明かではありませんが、天鳥船命を奉祀した古社であることは確かでありませぬ。清和天皇の貞観元年に、常陸國正六位上石船神に従五位下を授くとの意味が古史に載せてあります。岩船川の流れに架けた御橋を渡り、石の階に登ると古風な拜殿があります。拜殿の奥には、兜形の大巖石が苔むして神々しく拜まれます。

社の左手に長さ六メートルもあらうといふ舟の形をした石が玉垣の中に在ります。中央の窪い所には常に清水が湛えられいつも涸れたことがありません。早魃の時に之を渌つて雨を祈ると必ずその驗があるさうです。

春は若葉、秋は紅葉、そして小川の水は何時も清らかにすがすがしい境内であります。

五 村社 大井神社（式内）

飯富村大字飯富にあります。縣道を直下に控へて、那珂郡一帯の丘陵を見渡し、遠く多賀の連山を指し得べき景勝の社域であります。春は麥の穂波の上から白帆を眺めることも出来ようし、秋は千町田に働く人々の姿も手にとるやうに見ることができます。

建借間命

祭神が建借間命であることは前に記しましたが、創建年代の不明なことは遺憾であります。徳川光圀が本社 of 由来を調べ、命じて社殿を造營せしめ、自ら扁額及び神鏡の奉納があつたさうであります。

石のお鳥居を潜つて、數十階の石階を登ると、拜殿、本殿が杉木立の中に、東面して建つてあるのも何となく神々しく拜されます。

延喜式内

以上五座の社は、何れも延喜式内の神社といつて、昔醍醐天皇の延喜年間、延喜式を御制定になつたとき、日本全國の神社の中から二千百三十二座をお選びになり、之れをその神名帳にお載せになつた神社であります。式内二千餘の中、常陸の社は二十八社、その中の七社が今の

東茨城郡内に在り、更らにその中の五社は何れも我が郷土内の神社であります。

この外、式外の神社にも、創建の古い由緒ゆいじよの正しい社は澤山あります。今、紙面の許す限りを記しませう。

六 村社 高房神社

西郷村大字下古内にあります。祭神は天孫降臨の時、お供をなされた建葉槌命であります。創建は元明天皇の和銅元年、即ち阿波山上神社より後れること僅かに七年、我が郷土に於ける古社の一つであります。

七 村社 三枝みえ祇神社

岩船村大字錫高野に鎮座。建御雷命、武許品命、天津彦根命を合祀してあります。創建は稱徳天皇の神護景雲二年といふことです。桓武天皇の延暦二十年、坂上田村麻呂が蝦夷征伐の際、本社に戦勝を祈願したと傳へられます。その後、清和天皇の貞観十七年には従五位下を授

建葉槌命

祭神は三柱の神々

くとの仰せがありました。

八 村社 鹿島神社

岩船村大字高久の鎮守であります。祭神は建御雷命。創建年代は明かではありませんが、光仁天皇の天應元年とも傳へられます。昔、坂上田村麻呂、蝦夷征伐の歸途、この社の近所で兵を憩やすみめ、携へて來た蝦夷の酋長、惡路王の首を當社に納めたといふことです。この首は後、木で之れを模造し社寶としておいたのを、徳川光圀が之れに修理を加へさせたことがあります。

九 村社 手子てこ后ご神社

坏村大字上坏に鎮座してあります。平城天皇の大同二年の創建で、

建御雷命



社 神 后 子 手

埴安姫命

埴安姫命を祀つてあります。中世、手子木崎と書いたのを元祿九年徳川光圀の命に依つて正しくなほしたのださうです。埴安姫命は土を掌る神であるゆゑ、氏子の人たちは、土を大切に、瓦を屋根に葺くことを忌むといふさうです。

一〇 村社 風隼神社

建御雷命

石塚町大字石塚の西北隅、高久の臺地、坪の平地を見渡し得べき景勝の地に鎮座してあります。創建年代は桓武天皇の大同元年で、建御雷命を奉祀してあります。永祿年間、石塚城主源義國が社殿の修繕をしたことがあります。

一一 村社 白山神社

祭神は三柱の神々

澤山村大字赤澤。白山といふ山の頂に鎮座してあります。祭神は、菊理媛命、伊弉諾命、伊弉册命の三柱であります。後柏原天皇の永正十二年、加賀國白山の神を勧請したと傳へられます。古來、嵐除けの神として、春季登山參詣の人が多うございます。

この白山は、平野の盡きる所に聳えて居るので、眺望が極めて廣く、山頂からは我々の郷土が殆ど一目に見えます。春は青い麥畑の間々に黄色な菜の花の交れるさま、秋は美しく刈り上げた田の面に小鳥の落ちる眺め、那珂川を上る白帆、縣道を走る自動車、さては道路の走向、人家の聚落、耕地の分布など、繪のやうな景色が地圖そのままによくわかります。

一二 村社 吉田神社

祭神は三柱の神々

伊勢畑村大字下伊勢畑にあります。祭神は伊弉諾命、日本武尊、譽田別尊の三柱で、聖武天皇の神龜元年の勧請と傳へられます。その當時は伊弉諾命をお祀したのでありましたが、後、二神を合祀し、元祿九年から今のやうな社號に改まつたのです。

一三 その他の村社

以上の外、鎮守の神として祀られた社が殆ど各大字毎にあります。一々書き誌すことを略します。併し、何れもそれの由來ある社で、

今、鐘樓へ登りかけた坊さんは、暫歩を停めて子供等の姿にみとれて
あます。やがて「ゴーン」と鐘の音が平和な空気の中を、森を越えて野を
越えて、彼方の里へと消えました。

櫻の花がまた一しきり散ります。

皆様、鎮守の社の外に、われ／＼故郷人の心を動かすものは、山のお寺
であります。春の朝、秋の夕、その森、かしの丘から、ゆるく低く、そし
て静かに響いて来る鐘の音こそは、私共にとつて忘れ難いもの、一つ
であります。私共は嘗て之れを母の懐にききました。歸る家路にき
きました。未明の臥床にききました。夜半の寝ざめにききました。
私共の聞いた如くに、私共の父も母もはたまた遠い祖先も聴きました。
私共は、今お寺の鐘をきく毎に、その人の在せし昔のことを偲びます。
ましてそのお寺の縁起開創に歴史あり由來あるを知つては、私共の若
き心は、昔懐しの情に堪えません。

一 大部山眞佛寺（眞宗）

私共の心はか
うして伸びる

親鸞上人の

田植唄とその遺蹟

五劫思惟の苗代に

兆載永劫のしろをして

一念歸命の種をおろし

自力難行の草をとり

念々相續の水を流し

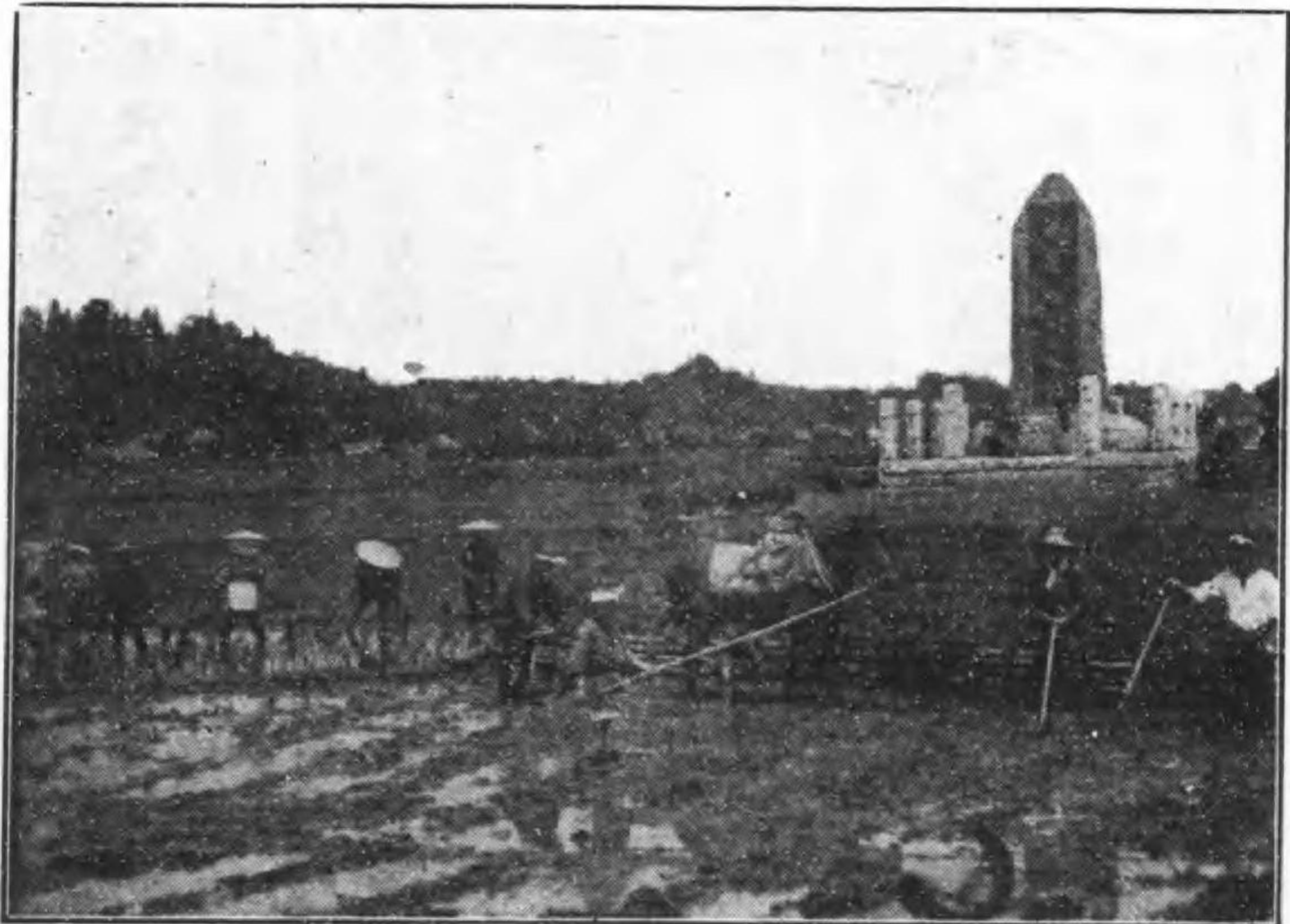
往生の秋になりぬれば

このみとるこそうれしけれ

南無阿彌陀佛

南無阿彌陀佛

眞佛上人



飯富村
大字飯富
にありま
す。親鸞
上人の開
山で眞佛
上人の建
立に係る
といひま
す。
眞佛上
人は、大部
平太郎と
呼び平氏

祖師親鸞

の末流で佐竹氏に属した武士でありましたが、厚く佛教を信じ、親鸞の弟子となり、故郷にこの寺を營んで自ら眞佛坊と號し、龜山天皇の弘長元年に歿しました。

これより先、親鸞が稻田の草庵に在る頃、この地へ來て布教をしてゐました。時はちやうど田植の盛里の人々は、田植唄の節面白く、春の日永を立ち働いて居ります。之れをみて親鸞は、「いかに方々、自分もお仲間に入らう。」といひつゝ、人々の止めるもきかず泥田に入り、佛教の教を説いた唄をうたひながら、田植を手傳つたといふことで、今此の地に大きな記念碑が立て、あります。

眞佛坊大部平太郎は、龜山天皇から長くも眞佛上人との號を勅賜されました。寺の境内に上人の墓があります。

二 白雲山小松寺 (眞言宗)

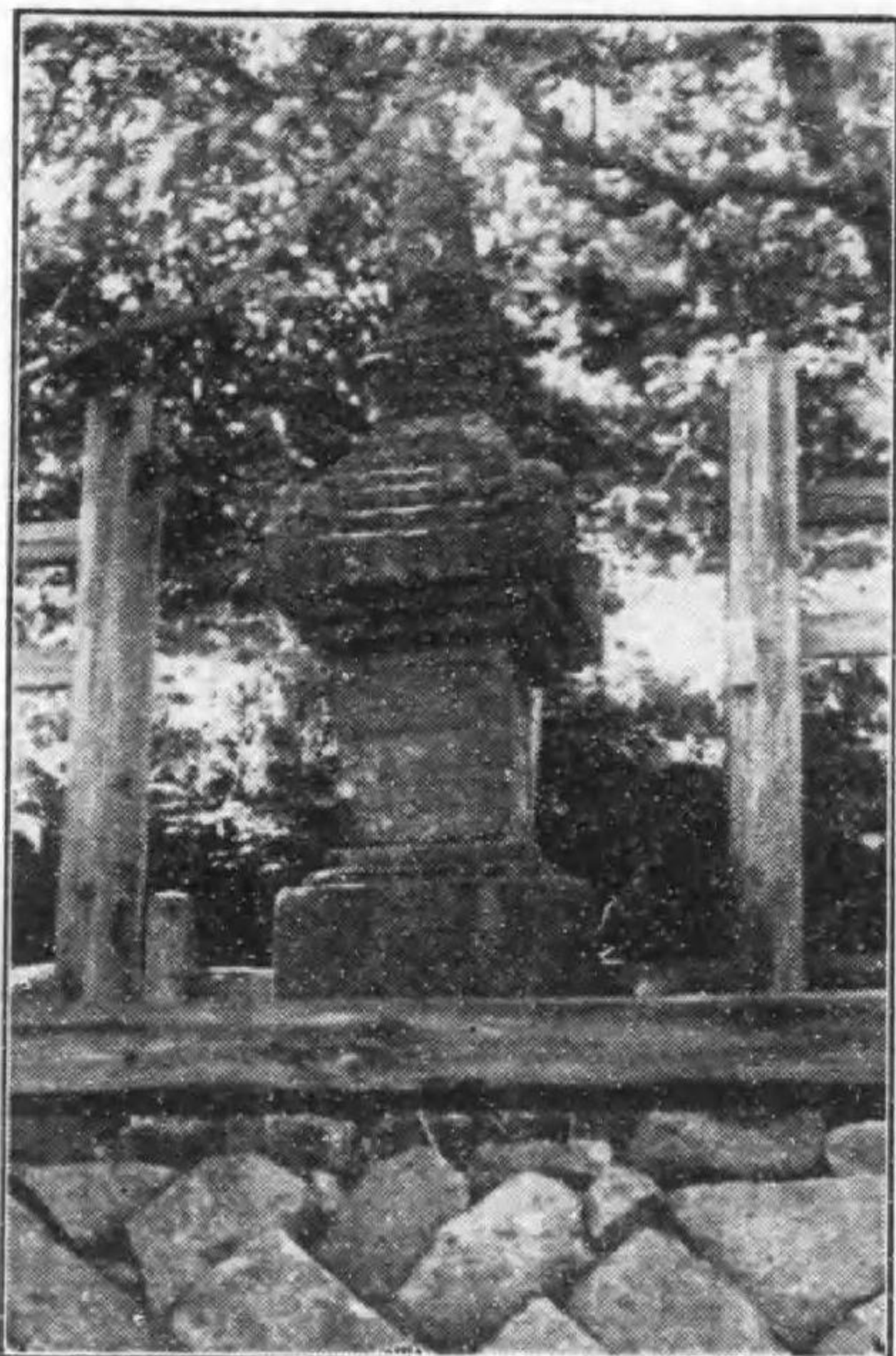
小松村大字上入野。藤井川を稍々はなれて、頂は緑深く麓に白雲の湧くかと思はれる山があります。山の中腹に寺が在ります。山は即

僧行基

ち白雲山寺は即ち小松寺であります。

寺傳に依れば、聖武天皇の天平十七年、僧行基教化を東國へ布く爲めに、はるく常陸に下り、この山を拓いて靈場としたといふことであります。

平貞能



小松内府重盛公墳墓

氏の衰運をなげいて、終夜泣き明し、遂に公の遺骨を捧げて一度は高野山に入りましたが、更らに關東に下り、公の一族大掾氏を頼つてこの地に來りました。そして公の墳墓をこの地に定めて小松寺を創め、自ら

降つて安徳天皇の壽永

二年、平宗盛一族を擧げて

都落をした時、家臣平貞能

も一度は京都を去りました

が、思ひなほして再び京

都に歸り、舊主平重盛公の

墓に詣で、餘りに早き平

は小松坊と號して、永く公の冥福を祈つたといふことであります。時は後鳥羽天皇の建久四年十月であります。

今、白雲山の中腹、杉の木立小暗くて、參道苔滑かなる所、一基の石塔こそ忠孝兩全の人内大臣重盛公の墳墓であります。

一段低く公の夫人得律禪尼竝に大掾義幹の二子である小松坊盛昌法師の碑があります。



小松寺國寶

國寶
史蹟

この寺の秘寶たる木造浮彫如意輪觀音像は、重盛公の守護佛と傳へられ、國寶中の珍と稱せられてあります。又墓は、最近本縣から史蹟として指定されました。安置されてある十一面觀世音は、行基の境内に觀音堂があります。

手になつたものといはれてあります。このお堂と兩唐破風の中雀門とは、寺院開創の際大掾義幹の寄進に係るとの事であります。

水戸義公嘗てこの寺に詣て、この如意輪觀世音を拜しその作の尋常ならざるに愕き、水晶の覆蓋を製してこれを寄進し、事の由を自書して納めさせました。

「小松寺に傳來する如意輪像は、弘法の彫る所なり、予新に莊嚴を加へ隔るに水晶を以てす、物の像を汚さんを畏れてなり」

貞享四年丁卯十一月

源 光 圀 □

仁孝天皇の天保四年には、水戸烈公もこの寺に詣て、内府の墓を拜しみやこよりひきし小松のはかなれば

千とせの末ものころとぞみる

と、時の住持に書き與へたといふことであります。

明治二十八年、官民有志の企てによつて、一大紀念碑が建てられました

た。篆額にはかしくも小松宮彰仁親王の御筆をいたゞき、文は舊藩主徳川篤敬侯爵の撰であります。

三 佐久山薬師寺（天臺宗）

石塚停車場を出ると、東に萱葺のお堂が見えませう。あれが薬師寺です。お薬師様といった方がよくわかります。

坂上田村麻呂
昔、平城天皇の大同二年、坂上田村麻呂は國家鎮護と爲にとて、飛驒の工匠を遣して、さきに自分が蝦夷征伐の際通過した當地へ寺を建てさせたといふことであります。これがこの寺の起原です。併しその後世の亂と共に寺も衰へはてたのを、長慶天皇の正平二十三年に、佐竹義敦がその三男宗義をこの地に封ずるに及び、惠一上人を招いてこの寺の開山としました。けれどもその後盛衰一ならず、且つ屢々火災の難にあひ、昔の面影は見るべくもなくなりました。けれ共明治の中頃までは、境内に三重塔、地藏堂なども備り、客殿、庫裡も手廣く、今の町役場の裏手に黒門があり、專賣支局出張所のあたりも、大木が茂り合つて居

惠一上人

たさうです。

薬師如来
國寶

本尊薬師如来の像は、その胎内佛及び日光月光の兩侍像と共に國寶の指定を受けてある世にも得難き珍寶であります。そもく薬師如来は、佛説に依れば、瑠璃光如来とも稱し、醫藥の功德ある如来であります。はじめこの如来がまだ修行中の頃、人の爲め世の爲めにとて、十二の誓願を立て、それを理想として必死の修行を續けました。十二



國寶薬師像

の誓願とは、一切の身の病、凡百の心の煩から脱れて、人にも我にも平和な生活を得させようとの願であります。斯くて彼れは、この誓願を見事に成就して、遂に如来と崇められたといふことであります。

今、本堂に向つて右手にある樹木は、菩提樹ぼだいじゆといつて、傳教大師が支那から持ち歸つたものださうです。併しその古木は既に亡くなり、今あるのは若芽の成育したものであります。

靈元天皇の寛文三年、藩主光圀がこの寺に来て泊り、春園、高久、錫高野を巡視して、地方の風俗や産業を視察したことがあります。その際、公は住持の請に依り、境内へ白檀びやくだんの木を植ゑられました。この木は今もよく生育して在りし昔を物語り顔であります。

毎年陰曆四月八日は、この寺の縁日であります。境内は參詣の人で、非常に賑ひます。本堂には、小なお釋迦さまの像を飾つて甘茶の供養をしてゐます。芝居、手踊、花火などで人の足を停め、果物、玩具、盆栽などの露店が立ちならび、物を賣る聲、客を呼ぶ聲かしましいばかりです。

四 寶幢院寶嚴寺(眞言宗)

寶幢院坂を上ると右手に寺の黒門があります。門を入つて更らにけやうつくり禪造の白門があります。寺域は、東は崖に面して那珂川に臨み、南は斷

縁日

知空上人

正義公と以傳僧

崖の下に田圃が開け、眺望のすぐれた土地であります。

この寺は、後小松天皇の應永三年、知空上人の開基であります。上人は下總の人でありましたが、その當時同國の人が石塚淨瑠璃光寺(藥師の寺)の開山となり、惠一上人と稱して仰がれてゐるのを慕つて石塚に來り、名を上宥と改め、此の寺を創めたといふことでもあります。

その後、歳移るにつれ、いつか寺運も衰へてゐたのを、藩主光圀が之れをなげいて、元祿九年京都から以傳僧正といふ高僧を招き、中興の祖としました。以傳僧正の學徳には、光圀も餘程敬服してゐたと見え、僧正が京都へ歸ることゝなつた時、

「あゝ、我老いたり。何日か再會を期し得べき。長途の旅、露霜の難多し、法の爲め願くは自愛せられよ。」

との意味を書き送つたといふこととあります。光圀が學者、高僧を遇するの厚き之れにても知るべきであります。

五 太古山清音寺(臨濟宗)

太古山清音寺。名を聞いてさへ清々しいそして昔懐しいやうな情
が起るではありませんか。

石塚から笠間街道を約六軒、古内の谷をひたした水は緑深い山の裾
を洗つて、南へ、西へ、更らに南へとはしります。その山を負ひ水を控へ
たお寺こそ、我が清音寺であります。

時はちやうど、嵯峨天皇の大同四年の頃、弘法大師は此の地に草庵を
結んで、東國鎮護の靈場としましたが、後大師の高弟眞雅僧正は師の遺
命に依つて、此地にお寺を開き鎮護山大聖教院淨光寺と號したといふ
ことです。

その後、世の亂れと共に、お寺も荒廢したのを、後村上天皇の興國五年、
當國の領主佐竹義敦、この寺の由來を聞き、且つは又おのが父貞義の冥
福を祈るために、覆庵禪師を當國信太郡(今筑波郡に屬す)より迎へて開山とな
し、堂宇をたて規模を整へあらためて太古山清音寺と號しました。覆
庵禪師は當時世にかくれなき高僧で、足利尊氏からも度々招かれたこ

弘法大師

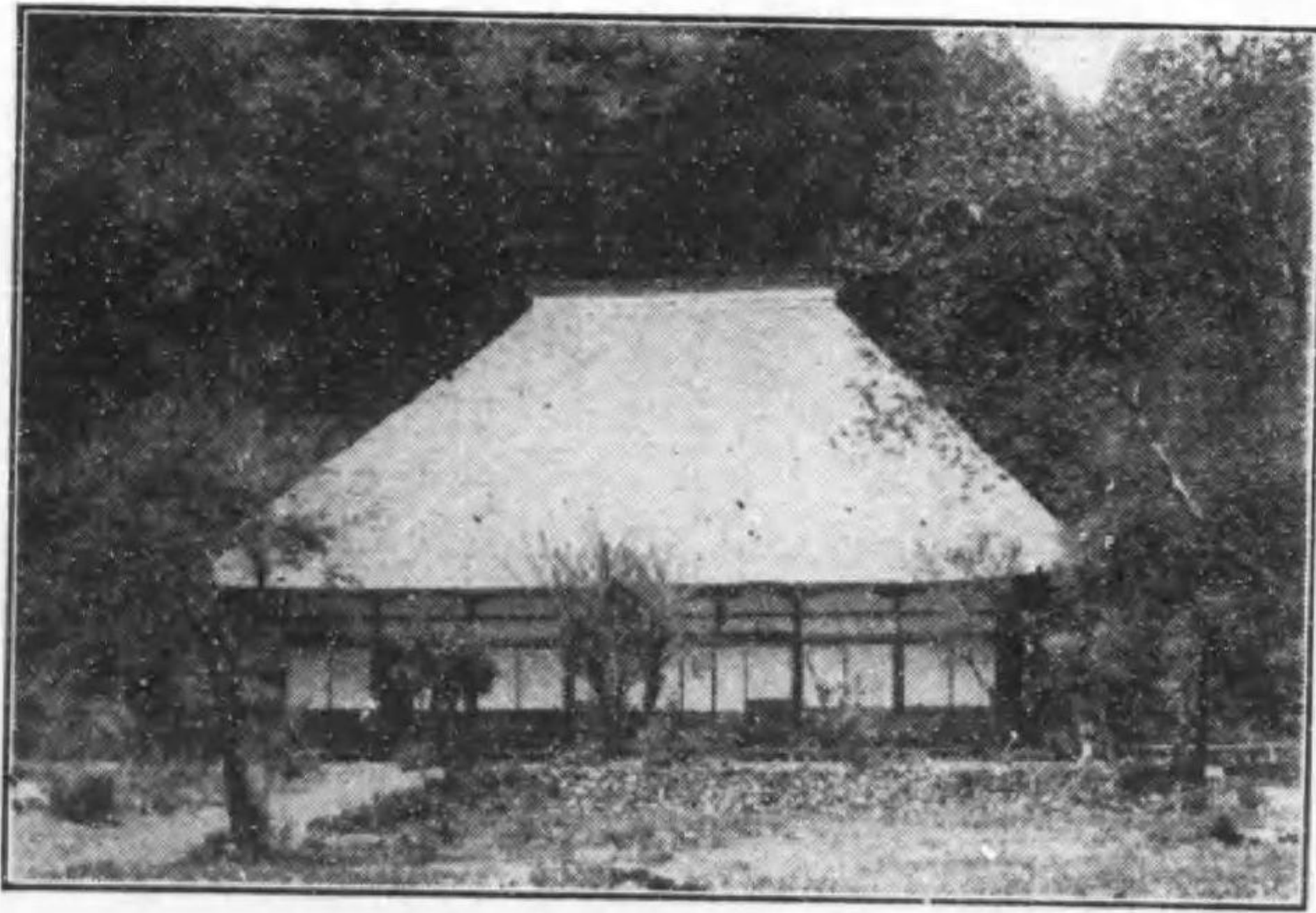
眞雅僧正

覆庵禪師

とのあるさうです。

その後、徳川家康以後幕府からも代々
手厚い保護をうけて、七堂伽藍も完備し
て、山門の屋根高く雲を拂ひ、鐘樓の鐘長
へに法を傳へて、實に地方教化の道場で
ありました。藩主光圀は度々この寺に
詣で、時にはかの心越禪師を伴つて詩歌
の雅遊を試みたこともありました。

然るに、明治維新後は、幕府よりの朱印
地(百五十石)も上地となり、爲めにお寺の維持
にも困難を來し、またと得難き寶物もい
つか失せて、精巧を極めた仁王門も遂に
外人の手に渡り、なほ且つ兵火の難にも
あひ、今廣い境内には本堂のみ僅かに昔の面影をとゞめ、山門、鐘樓、開山



太古山清音寺本堂

堂の跡はたゞ礎石を見るのみであります。

今、本堂に上り櫓の床張を踏んで、内陣深く本尊を拜むと、金光まばゆき慈容圓滿のお姿は、優しく我等をみそなはし、兩側には、覆庵禪師、普應國師の像がさながらの俤を宿して侍座してゐます。

お寺の什寶としては、そのかみ開山禪師着用の極めて質素な法衣と、棕櫚製の古雅な拂子があります。外に佐竹義重、徳川光圀の書簡があります。どちらも時の住持に宛てたものでありますが、黒色なほ鮮かにその人の風格が偲ばれます。寺に藏する一切經は鐵眼和尚の刊行したものであります。

境内には佐竹秀義(四世)同義敦(十世)の墓が開山禪師の墓と相並んで苔深く鎖とぎされてあります。

六 高根山大山寺(眞言宗)

阿波山上神社の森の後から西へ立派な新道が出来ました。この新道を約一軒で岩船村の臺地があります。臺地へ登ると直ぐにお寺の

弘法大師

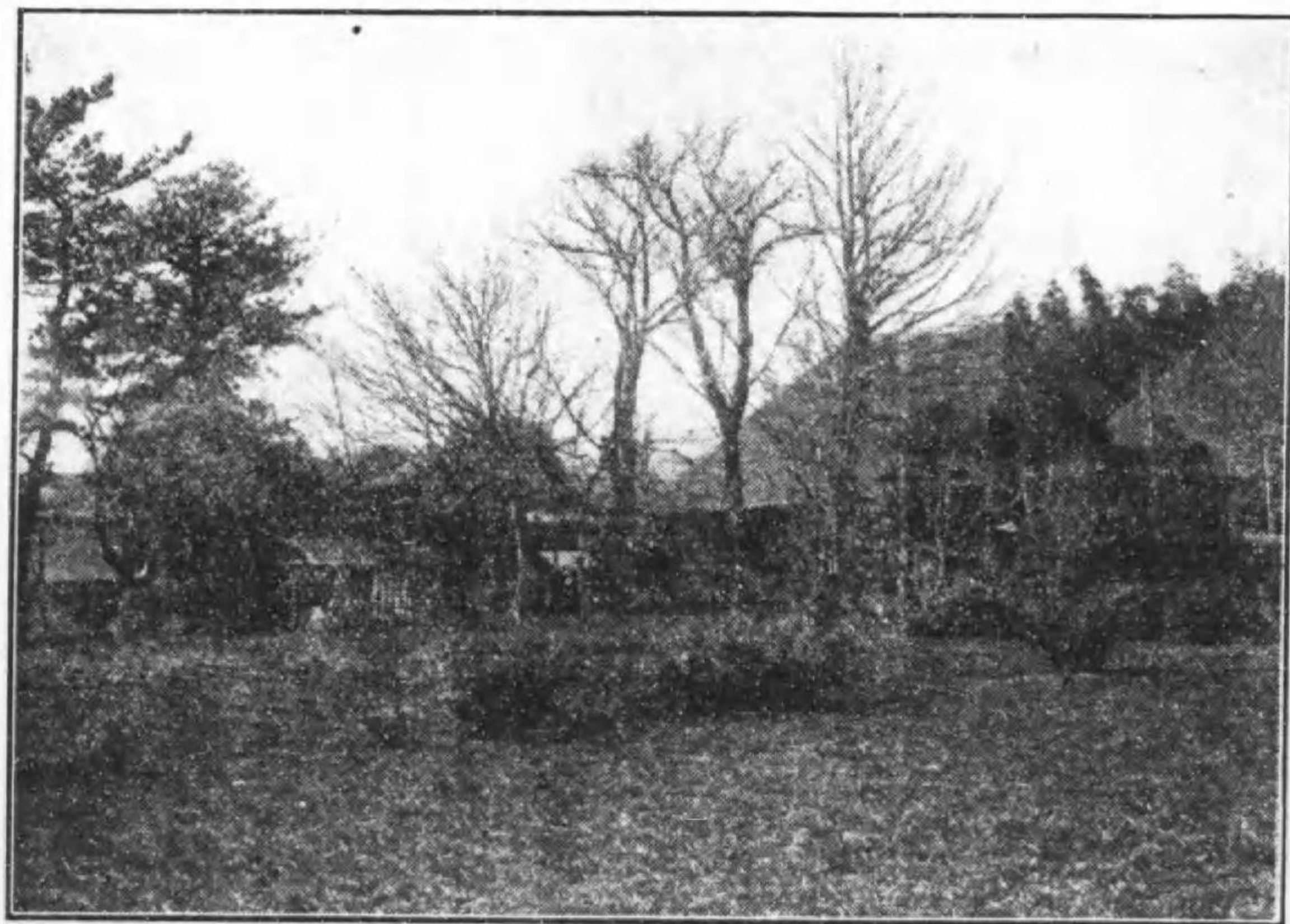
門前へ出ます。お寺は即ち大山寺です。

寺は大同四年に弘法大師が清音寺に草庵を結んだ時、開かれたものだといわれます。

その後、佐竹義敦が子義孝を大山(今の阿波山)に封じて大山氏を稱するやうになつてから、代々大山氏の崇敬する所となり、手厚い保護もうけてきました。

乾闥婆王尊

この寺に安置する乾闥婆王尊は、弘法大師の所作と傳へられ、子供の蟲封じに靈驗著しき由を以つて參詣祈願の人は、郡



高根山大山寺

内は勿論遠くは福島、千葉、栃木の諸縣よりも絶えた事はありません。皆さまも定めて小さい時、お母様におんぶして参詣したことがあるてせう。

婆王堂の前には、鐘樓の設もあつて朝夕の鐘の音ゆるく、村人に活動を促し安息を與へるかのやうであります。

この寺の維新當時の住持鱗祥といふ僧は元治甲子の亂に、勤王軍に加り港の陣に在りましたが、幕府の軍艦に陳情しようとして輕舸に乗つて沖合を目指し、遂に海上で戦死しました。年二十六才の青年僧侶ときゝました。

七 瑞雲山龍谷院(曹洞宗)

澤山村下阿野澤から、縣道を左に折れると田圃のつきる所、小高い山の中腹にあるお寺、これが即ち龍谷院であります。前に數十級の石階を控へ、はるかに久慈、多賀の連山をのぞみ景勝の地であります。

寺は、後花園天皇の長祿三年、大功正傳禪師の開創に係るもので、禪師

勤王僧鱗祥

大功正傳禪師

は彼の一休禪師の高弟であります。この寺も開創以來度々火災に罹り、昔の面影はみるべくもありません。境内に觀音堂があります。安置する千手千眼の觀世音は、もと大山因幡守の守護佛と傳へられます。寺には、開山禪師、乗用の緋網代駕ひあみかぢ、着用の袈裟けさ及び寺院建立の際地中より得たといふ龍骨などが什寶として残つて居ります。

八 廢絶の寺院

維新前は、各村ともお寺がいくつもあつたやうです。今皆様の村々に、地名に寺の名のついたものや、お寺に縁あるものがあります。そこには大抵お寺があつたやうです。それが色々の事情で、他に併合されたり、移轉したり、或は全く廢寺となつたりしたのです。今、その中の二三を記すと、

金剛院

石塚には金剛院満石寺といふのがありました。義公は度々、この寺に來泊しました。この寺の落花を詠じた公の歌
ふむはをし踏まねば行かむみちもなし

靈華寺

古こと思ふ春の山寺

石塚には靈華寺といふもありました。正徳二年、河和田から移したものださうです。大正十四年、本寺の復舊を出願して許可されましたが、未だ堂宇の建築をみる事が出来ません。

阿彌陀寺

阿波山には、阿彌陀寺といふがありました。宮原山観音院と號し、建曆二年、行觀上人の開基でありましたが、天保十三年破却されました。伊勢畑村檜山には妙蓮寺といふ日蓮宗の寺があります。慶長三年日辨阿闍梨の開山でありますが、今堂宇廢頽して住職も居りません。境内に公孫樹の老木及び枝垂の櫻、空しく昔を語り顔です。

妙蓮寺

この他各村何れも少くも一二、多きは四五の寺がありましたが、一々こゝに記すことを略します。

第四 郷土の人々

國史を學ぶと、和氣清麻呂、楠木正成のやうな忠臣や、源義家、豊臣秀吉

のやうな武將や、菅原道眞、北畠親房のやうな學者賢臣が、つき／＼にあはれて、朝廷の爲め日本の爲めに盡したことがよくわかります。

我が郷土にも、それ／＼勝れた人があつて、郷土の爲め國家の爲めに働きました。わが郷土が富み、わが家が榮えるのは、主としてこれらの人々のお蔭に依ることです。數多い先人の方々のうち、その重なるものを次々に學びませう。

一 大部平太郎

この人が後の眞佛上人であることは前に書きました。

時は順徳天皇の建保の頃、親鸞上人が稻田の草庵くさいんに教を布き、遠近集り聴く者多しとのことに、大部平太郎はひそかに稻田に赴き親鸞の教を受けました。親鸞の教にいたく心動きたる彼は遂にその弟子となつて眞佛坊と號し、弟平次郎をも説きて入門せしめ唯圓坊いづみだんぼうと號せしめました。河和田の報佛寺はこの平次郎唯圓坊の創めたものであります。

大部平太郎親鸞の弟子となる

貞永元年秋九月、親鸞いよ／＼京都に歸ることゝなつたとき、眞佛坊は深く名残を惜み、夫妻相携へて稻田の草庵を訪ひました。すると上人は「たとひ形は別れても心だに忘れずば千里の住居も遠くは思はじ」と諭し自ら彫刻した阿彌陀如來の像に添えて

こひしくば南無阿彌陀佛を唱ふべし

我れも六字の中にこそすめ

と一首の和歌を興へたといふことであります。

師弟再會

後元治元年二月、平太郎は領主佐竹氏の命に依つて熊野權現に參詣すべく京都へ上つた時、舊師を訪ねてしみ／＼と昔を語り、絶えて久しき師弟再會のうれし涙にくれたといふことです。

二 入野七郎次郎

延元元年、菊水の旗一ながれ楠木正家の手によつて瓜連城に翻るや、賊將佐竹貞義は度々之れと戦つて互に勝敗がありました。

この時、佐竹の一族佐竹幸乙丸の部將に入野七郎次郎助房といふ武

士がありました。今の小松村上入野の人であつたさうです。主人幸乙丸が、本家の命のまゝに官軍と戦ひ、賊名を受けてゐることを苦々しく思ひ、ある日、主人に向つて

「いかに御本家の仰せなればとて、瓜連を苦めて朝敵の譏を受けることは、あなたの本意ではありませんまい。どうぞ深い御量見をなさるやうに。」

と義心面にあらはれました。幸乙丸は之れをきいて、

「實は自分もとうから考へて居つた。いかにも汝のいふ如く、たとひ本家にそむくとも忠義の道にそむかぬやうにしやう。」

斯くて幸乙丸は、獨りその一族から離れて、正家を援け、七郎次郎は瓜連城に入つて、直接正家の指揮を受けることになりました。瓜連城の勢ひ一層盛になつたのはいふまでもありません。

この年の五月、北畠顯家再び奥州に下るべく、宇都宮に在りときくや、七郎次郎は正家の命に依つて顯家の本陣を訪れ、地方の状況を報告し

瓜連城に入る

瓜連落城

たといふことです。

十二月、賊將義敦は大軍を催して瓜連を攻めました。之れを聞いて那珂通辰も那珂西城より來り援け、力を協せて戦ひましたが、城遂に陥り、正家は陸奥に落ち、通辰は自殺し、幸乙丸は出で、降り、常陸北部の官軍全滅の悲運にあひました。

さるにても彼の快男子七郎次郎の最後やいかに。忠義の鬼と瓜連城に死んだか。正家に従つて陸奥に落ちたか。それとも再義をはかるべく命を全うしたか。瓜連城趾露徒らに滋く、昔を忍ぶ由もありません。

三 興野助九郎

氏は文政元年、今の岩船村高久加藤木氏の長男に生まれました。子供の時から才氣が勝れてゐましたが、十二歳の年から、親族である今の小松村増井の興野氏に寄寓して、當時並びなき學者であつた成澤(今の山根村)の加倉井砂山先生の門人となりました。砂山先生は、助九郎の英才を

加倉井砂山の門に入る

國事につくす

愛して熱心に教へ、助九郎も亦先生に敬服して勉強したので、學業は日に々上達して、遂に塾長(じゆくちやう)となり教授の手助けもするやうになりました。これを見て興野氏は無理に自分の養子に貰ひうけることになりました。

弘化元年、藩主徳川齊昭が幕府に罪せられ、家臣藤田東湖をはじめ誠忠の士が幽せられたと聞くと、氏はその罪なきことを訴へようとして、江戸へ上らうとしたが、捕へられて水戸赤沼の獄に投ぜられました。かくて在獄五年、この上なき難儀をしましたが、齊昭の愼(つしま)とけたとき、氏もまた釋(ゆめ)されて家に歸ることが出来ました。

そして弟子を集めて文武の道を教へてゐましたが、安政三年十月には水戸弘道館の講師を命ぜられました。その頃、世は尊王攘夷の論さわがしく、安政の獄、櫻田の變起り、日夜國家の前途を憂へて居りました。然るに元治元年、宍戸侯松平頼徳が藩主の代理として、水戸城に入らうとしはしなくも城兵の拒む所となつたとき、氏は遂に志を決して、

宍戸侯の陣に馳せ加はり、藤柄の戦争から磯濱、湊に轉戦して花々しい働をしました。

けれども事志とちがつて、幕府からは賊徒の取扱をうけ、宍戸侯も出て、降参した爲に、氏も亦幕軍に降り、翌慶應元年四月四日、上總の東金で折からの落花と共に、刑場の露と消えました。年四十八の男盛であります。

やがて明治の御代となり、水戸常磐原に改葬せられ、明治十三年には靖國神社へ合祀仰出され、永く護國の神となりました。
家を出る時、

結びおく草の庵のえにしあらば

またも来て見む故郷の月

と書きつけて、暗に永別の意をあらはしました。故郷の月は昔のまゝでありますけれども、草の庵いたづらに荒れてその人遂に歸らずなりました。

終に一身をさ
げた

四 袴塚周藏

東湖先生の詩

小松村大字増井の人、夙に勤王の志深きは藤田東湖先生の薫陶に依るといふ、烈公の雪冤運動に就ては寢食を忘れて奔走し、身亦捕はれて酷い目にあひました、東湖先生がこの爲めに左のような漢詩を作つてくれたことがあります。

百畝の田五畝の宅

深耕易耨身生を託す

却て嘲る城市の悠々たる者を

漫に雙刀を帶て一槍を樹つ

この意味は「百姓はして居るが、イザといふ時は國家の役に立つぞ、都會の者や、又平生二本の刀を差して無暗に力んで居る侍等には負けな

いぞ」といふことであります。
この人の長男に達といふがありました。勤王の志深く早くから京都に出て、木戸孝允と交を結び國事につとめました。

櫻田門外の變

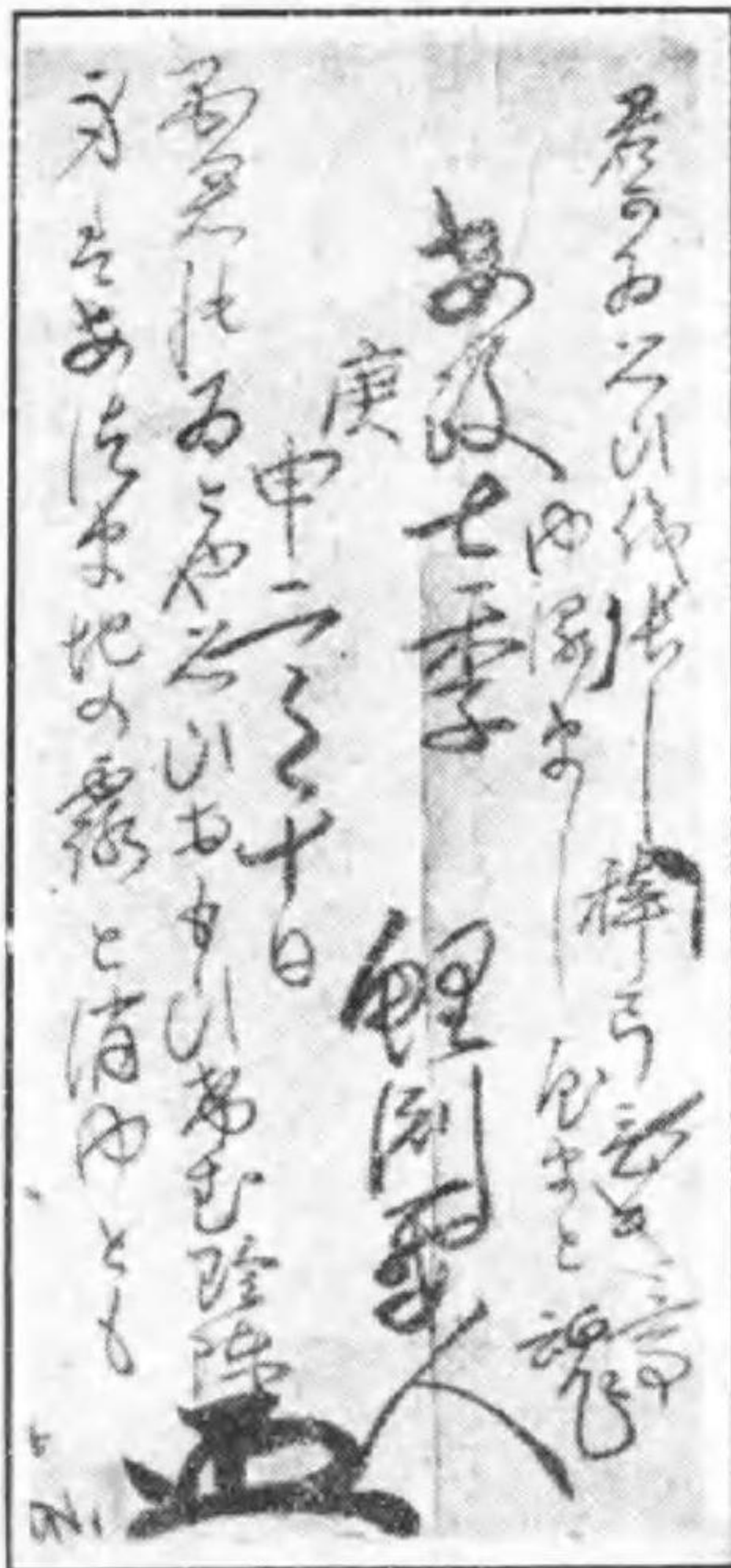
五 鯉淵要人

櫻田門外の變は、王政復古を促す機運を作つた義舉であります。決死報國の情に燃えた十八士が、雪を犯して白晝堂々と大老の陣列に迫り、遂によくその目的を達した忠魂義魄は、今日なほ我等の血を沸かしめるものがあります。十八士のうちに鯉淵要人があります。氏は即ち我が郷土の人であります。

氏は西郷村上古内の人で、家は世々鹿島神社の神職であります。早くから國學を修めまた武術に長じ、勤王の精神に富んで居りました。はじめ加倉井忠珍の弟子となつて學問を修め珍陣といふ名を貰ひました。或る人が「呼びにくい名であるから何とか改めてはどうか」とすゝめたところ、珍陣は頭をふつて「假名一字の恩たりとも忘れてはならぬ。加倉井先生からは深い御恩を受けた。それだのに折角師の君の下された名を勝手に改めようなど、はとんでもない。」と答へたさうであります。

師恩を忘れな

弘化の頃、藩主齊昭が幕府の爲めに罪せられるや、氏は那珂郡靜神社の齋藤監物等と江戸に上り、老中阿部正弘にその罪なきことを訴へた爲め、捕へられて水戸赤沼の獄に囚れの身となりました。やがて嘉永二年釋されて家に歸りましたが、世の中は益々騷はしく、大老井伊直弼



鯉淵要人筆蹟

は勅旨に背いて米國其他と條約を結び、朝廷の召命を故なく拒み、大名志士をば理由なく罪して、暴戾飽くなきを見るや、氏は水戸藩士等と相謀り、東に井伊大老を殲し、西に討幕の義兵を擧げる策を立て、自ら進んで大老要撃の一員たることを誓ひ、萬延元年二月ひそかに家を出て江戸に上りました。

かくて齋藤監物、關鐵之介などの人々と共に、三月三日櫻田門外に於

大老を討つ

て首尾克く井伊大老を討ち取つてその目的をとげました。そして事の由を老中に訴へようとして、その邸へと志しましたが、必死の奮闘に傷を負ひ爲に歩行の自由をかき、途中八代洲河岸に於て自ら割腹して壯烈なる最後をとげました。年五十一と聞きました。

増子金八

義士のうちに増子金八といふ人がありました。この人は己れ微傷だも負はぬを幸ひ、兼ての方略通り京都へ上つて討幕の義舉に加らうとしましたが、幕府の探索きびしい爲め、遂に機を失ひ、明治維新後は石塚に閑居して同志の後を弔ひつゝ、明治十四年この地に歿しました。さてもこの義舉を動機として、朝威輝き幕政たふれ、明治維新となるや、二十二年要人らの忠魂をば靖國神社に合祀仰せ出され、三十五年には畏くも正五位を追贈せられてその忠烈を賞せられました。はじめ氏が家を出るに際し、遺し置いた書面の中に

正五位を贈らる

「御國難以來、國恩の萬一にも報い奉りたいと色々力を盡したけれども、いよ／＼六ヶしき場合となり、この度萬民に代り、わが身命を大

神に捧げ、屍を武藏野にさらすべく決心しました。我が子孫たる者いよ／＼志を磨いて忠孝を勵み、わが志を繼いでくれるように」との意味がありました。そして更らに

君がため思ひを張りし梓弓

ひきてゆるまじやまと魂

君がためいさむ春駒むちうてや

武藏あぶみのあらんかぎりは

六 綿引新八郎

氏は西郷村下青山の人であります。この人も砂山先生の門に學び、青山の自宅から成澤まで、毎日通學して怠らなかつたさうであります。兵法戦術にかけては同門中人に後れをとるやうなことはありませんでした。興野助九郎と同じく、松平侯の軍に従つて、磯濱、湊に戦ひ、神勢館討入りの際は、ことに眼ざましい働をしました。

穴戸侯降参の際は、氏は極力その不可なることを説いたさうであり

雁に思をたくす

ましたが、議容れられず、氏も亦幕軍に降ることゝなり、遂に刑場の露と消えました。獄中にあつた頃

故里に言傳やれぬわれありと

知らずや雁のなきてすぐらむ

やがて刑せられるにのぞみ

陰雲明月を掩ひ 行人歩々なやむ

日没して山河黒く 劍光常陽を照す

七 高瀬宥仁

小松寺四十八世の住職であります。早くより學を好み、書をよくし特に和歌にすぐれてゐました。興野助九郎等と志を同うし、元治の國難には、法衣を脱いて長槍を提げ、各所に轉戦して勇名をうたはれましたが、遂に囚れの身となり、江戸の獄に送られました。時慶應元年五月二日、年四十二であります。後、靖國神社に合祀せられました。

辭世の歌に

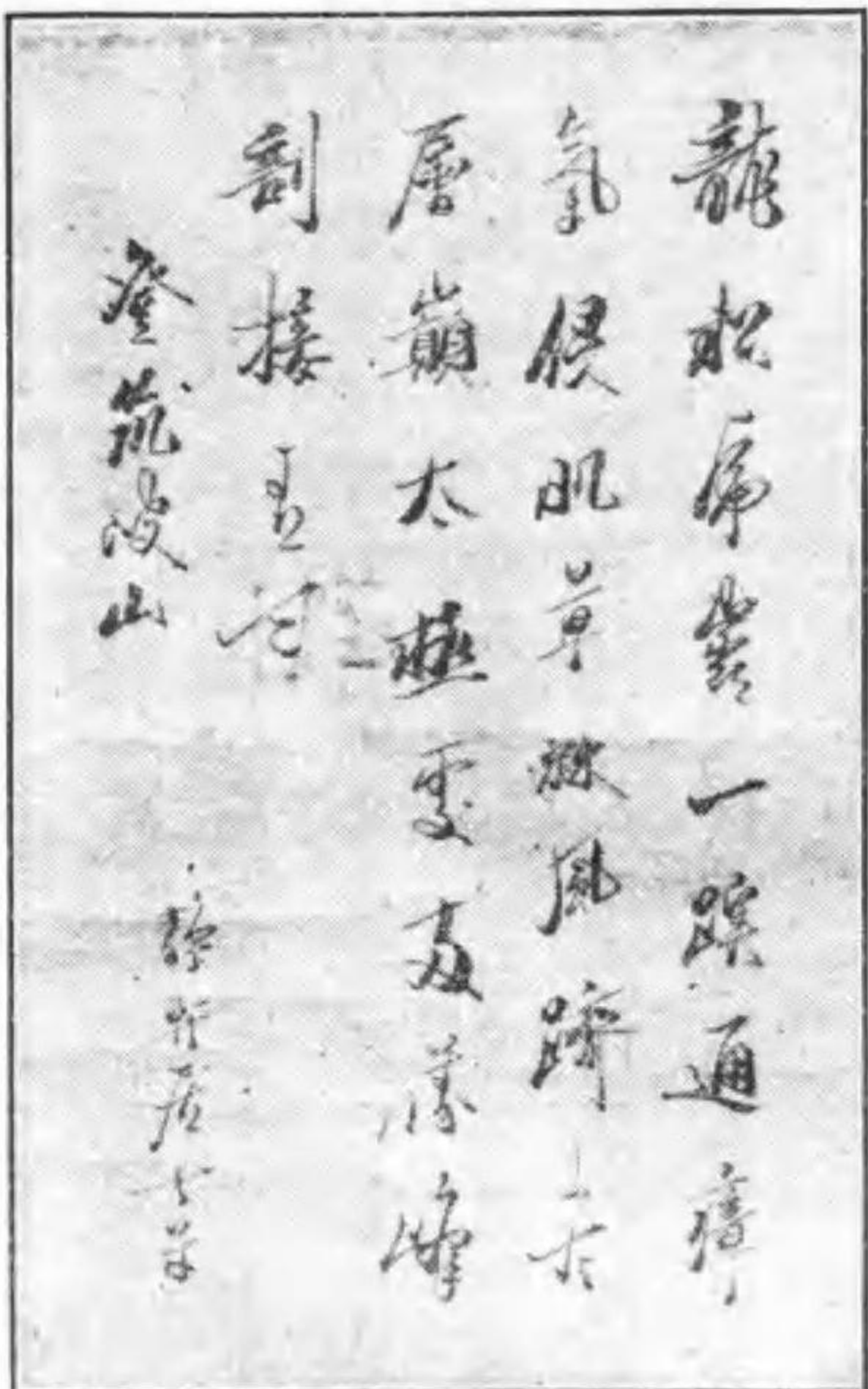
世をすてしこけの衣に影やどる

月さへくもる秋の宵々

八 寺門靜軒

石塚町大字石塚寺門孫八郎の子。父孫八郎江戸に出仕中、彼地に於

當代一流の學者



寺門靜軒の筆蹟

いて生れました。幼名源五左衛門、後良と改めました。早く父母を失ひ難儀を重ねましたが、貧しい中にも學問に精を出し、遂に當代一流の大家となりました。色々の書物を著しました。天保十三年、その著書の事に依つて幕府より罪せられ、江戸より逐はれることになりました。

した。それより各地に周遊し明治元年二月二十四日、年七十三を以つて歿しました。

九 島長重

石塚町大字石塚の人であります。十六歳の時加倉井砂山先生の門に入り、専ら砲術を學びまた書道にも巧みでありました。同門の友藤田小四郎(藤田東湖の子)が筑波山に兵を擧げて、尊王攘夷のさきがけとならうとしたとき、氏は喜び勇んで、小四郎の陣に馳せ加はり、下妻、高道祖の戦争を手初めとして、藤柄、湊、神勢館などの合戦に、いつも花々しい働をしました。後、武田正生、藤田小四郎等に随つて京都へと志し、上州に指しかゝつた時、高崎藩兵と戦ひ遂に壯烈なる最後をとげたといふことがあります。

一〇 生駒周藏

もと笠間藩士であります。赤澤の眉山(赤澤山)の景を愛し、峨眉(峨眉山)と號しました。廣く和漢の學に通じ特に書に巧みであります。各地を周遊して

到る所で弟子を集めました。遂に坪村上坪に居を定め、子弟を教へました。文化元年二月、年七十を以つてこの地に歿しました。門人等に依つて建てられた碑が手子后神社のほどりにあります。

一一 今瀬織部

上坪手子后神社の神職であります。弘化元年國難に際し、國事に奔走して一度入獄の身となりました。元治元年更らに松平六戸侯に随つて、磯濱、湊で戦ひ、更らに菅谷で敵と格闘中重傷を負ひ、遂に捕へられて同九月十六日刑せられました。死にのぞみ從容として

たとひ身は底のもくづになりぬとも

正しき道はふみなたがへじ

一二 黒澤止幾子

「ひなに生れし塵の身の拙(つた)き身をも忘れつゝ、御國の爲めと」はるく京都まで上つて立ち働いた婦人こそ黒澤止幾子といつて、我が郷土岩船村錫高野の人であります。早く父を失ひて母の手に養はれ、十九の

夫の亡きあと
母に孝養をつ
くす

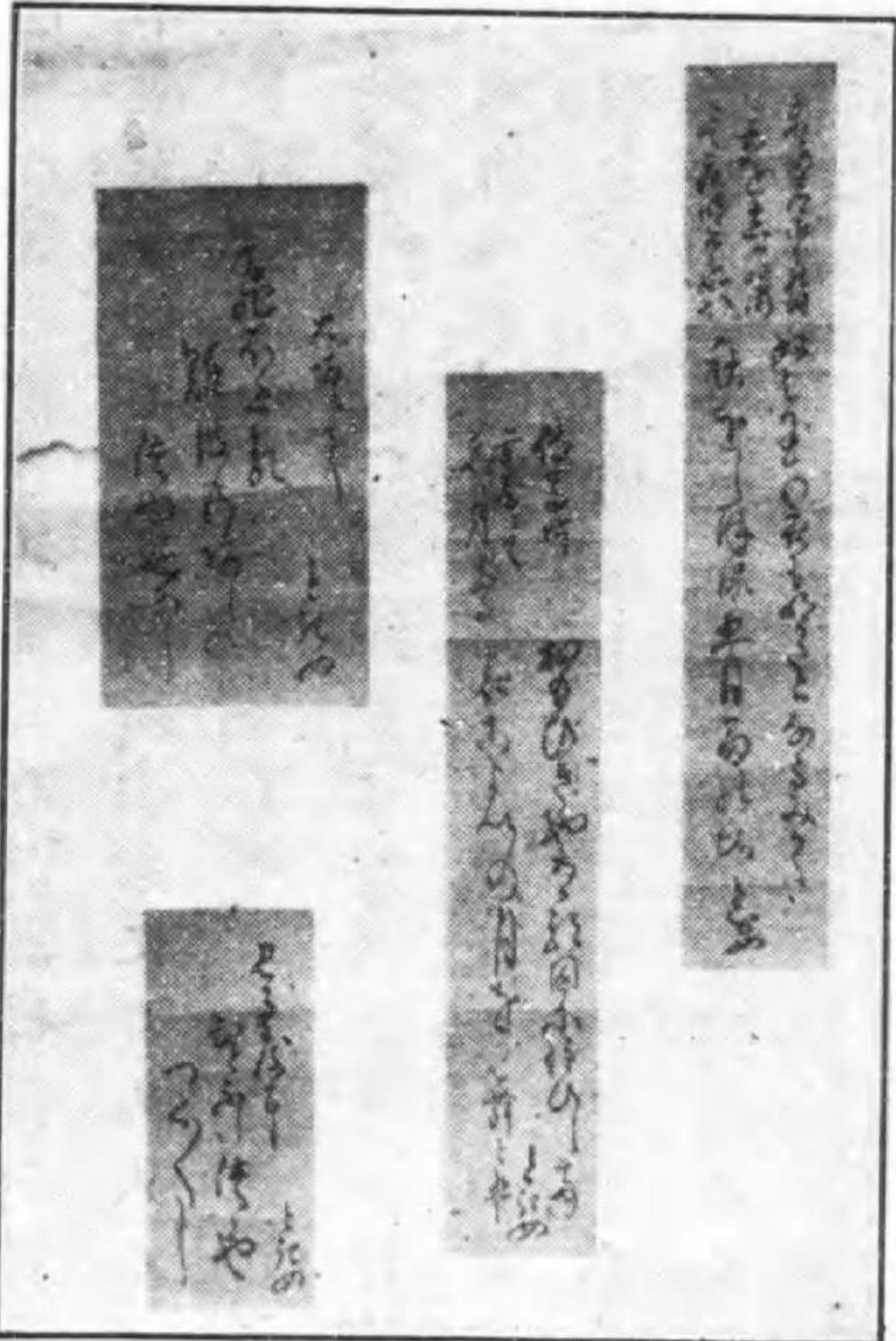
春、父の生家なる久慈郡小島へ嫁しました。然るに間もなく夫に死別したので、遺子を携へて實家に歸り、母に孝養をつくしつゝ、淋しく暮して居りました。



黒澤止幾子氏

弘化、嘉永の頃から國事
おだやかならずときくま
ゝに、一人ひそかに心を痛
めて居りましたが、安政六
年に至り、井伊大老の政治
向いよゝゝ暴逆を極めた
ので、もはや座して視るべ
きに非らずと考へ、母に暫
の暇を乞ひ、笈を負ひ笠を戴き巡禮姿に身をやつして家を出ました。
春とはいへ二月の寒、肌を破るが如きでありましたが、忠魂一徹、物とも
致しません。

かくて錫高野の實家から古内に出て、笠間より野州路を志し、上野、信濃より美濃に出て近江を経てやうやく京都に出ることが出来ました。時に三月二十五日、家を出てから三十餘日の旅であります。



黒澤止幾子筆蹟

まづ人傳をもつて前大納言東坊城聰長卿の邸に至り、その家人座田維貞を師として和歌を學び、機をうかひて長歌を示し、そして自分の志を述べました。

維貞、その長歌を一讀し

て、止幾子の忠誠憂國の至情に感じ、これを主人聰長卿に呈しました。すると卿は「東の果てにかうも見上げた精神の婦人があるか、頼母しき至りである」といつて之れを 陛下の御手許に奉つたといふことであ

長歌を上る

追放の申渡

從五位を贈ら
る

ります。あはれ、東野の名なし鳥、その聲かしこくも雲井の空にきこえたとは、目出度き限りではありませんか。

さても、その事早くも幕府に知れ、召捕へられて江戸に送られました。色々と責め糺たされましたが、別に深い罪とすることがないので、追放の申渡をうけて江戸常陸山城に立ち入ることを禁じられました。依つて下野國茂木に假住かりまひして、故郷を思ひ母を案じて暮しつゝありましたが、後罪赦ゆるされて郷里に歸ることが出来ました。

明治八年朝廷からその忠誠をおほめに預つて終身祿を賜り、皇恩の有り難きに感泣しつゝ、二十三年壽八十五を以つて逝ゆきました。

明治四十年更らに從五位を追贈せられて、その忠烈いよゝ世に彰あかになりました。

止幾子門出の朝志を和歌に托たくして

はる雨のふるすを出て、鶯の

やがて雲井になくぞうれしき

古内村にて鯉淵要人(後に櫻田門外に井伊大老を討つた人)と行きかはして

行きかふる人は誰ぞやと名を問へば

これぞ日本の要かぎとぞきく

古内川の畔、寒風すさぶ中、見送りの人とわかれて

雲井まで我をいざなふ神風は

吹くとも身にはさわらざりけり

座田維貞の手によつて上つた長歌の冒頭はつに

「千はやぶる 神代の昔 神々の しづめ給へし秋津島 げにも尊

き 日の本の 清き光は 古へも今も 千とせの末までも かは

らぬ 君が御代なるを」

といふ句があります。我が國体の尊いことをはつきりとよく言ひ表して居るではありませんか。

一三 船橋太郎衛門

澤山村下阿野澤の人であります。二歳にして母を失ひ、父の手に依

父に孝養

つて育てられました。後、父が年老いてからは、心を傾けて父に仕へ、備さに孝養をつくしました。その事が藩主に聞え、金一封を下して至孝を表彰せられました。時に天保十四年、太郎衛門四十二歳のときであります。

弘化年間、藩主齊昭幕府に罪を得るや、二年正月家を出て、三月十三日跡部能登守へ歎願書を提出したる爲め、忽ち捕へられて、水戸赤沼の獄に下げられました。獄中自分の着衣の糸をほぐし、塵紙に糊付して歌を記し残しました。その歌のうち、

もれてくる浮き世の空のほとゞぎす

心ひとつをすましてぞきく

細き日のうしと見しまにくれてゆく

夜もうらめしき赤沼の秋

さみだれの軒のしづくのきれくゝに

むすびておかむますらをの夢

罪赦つひゆるされて、暫く家に在りましたが、やがて萬延元年、櫻田門外の變起るや、まもなく家を出て、終に歸かへることなくなりました。その頃、井伊大老の藩地では、深く水戸を恨み復仇の噂うわさが高かつたので、それを探りに彦根に赴き、あちらで殺されたのではないかといはれます。

一四 大高要介

澤山村阿波山、大高市藏の子であります。姉はたか子といつて、下市高瀬氏下坪高瀬氏と同族に嫁し、三男一女を生みました。長子は即ち我が國感化事業の開祖たる故眞郷氏であり、次は即ち検事總長より司法大臣となられた小山松吉閣下であります。

要介氏は年若くして、國家を思ふ心深く、早く家を出て、筑波の義舉に馳せ加はり、藤柄に戦ひ磯濱に轉じ、湊みなとに屯とどしましたが、遂に武田伊賀守、藤田小四郎等に随つて西上しました。かくて野州路を経て上野、信濃より、美濃をすぎて京都に入らうとしましたが、路塞かきとつて入京することが出来ず、終に一橋總督の軍門に降りました。

小山司法大臣の叔父に當る

かくて武田、藤田以下幕府の糺問を受けると、なり、重立つた人々すべて三百五十二名何れも斬罪の刑に處せられました。大高要介氏も即ちその一人であります。歳わづかに二十二、あはれ若木の櫻、春をも待たで越路の雪と消えたこと無念の極みであります。時に慶應元年二月十五日、心ありてか、刑場の櫻蕾かたくして咲かうともしません。辭世の歌に

いたづらに消ゆるわが身は惜しからじ

花さく春のあるを思へば

明治八年五月、武田以下の幽魂を祀つた社に對して、松原神社の神號を賜り、十一年九月、天皇北陸御巡幸の折には一同の忠烈を嘆賞あらせられ、祭祀料を下賜せられ、後二十四年その重なる人々に對しては夫々御贈位の恩命がありました。一同にとつては、まさに花咲く春に逢つたことでありませう。更らに、近くは昭和八年十月、大演習御統監として福井縣に行幸の砌には、松原神社に勅使御差遣の仰がありました。

志士の人々の餘榮

一五 蓮山和尚

伊勢畑村上伊勢畑の人で、父を岸氏といひます。その母阿彌陀佛に祈つて生みしとか、幼きより才知人にすぐれ、行を慎み佛を信じ、十三歳にして江戸に上つて佛典を修め、十六つひに髪をそつて僧となりました。それから必死の修行につとめ遂に一代の名僧となり、かつては多賀郡大雄院の住職となり、更らに幕府の命によつて下野國大中禪寺に遷り、後、水戸義公の知遇をうけて太田新宿の古禪寺に住しました。元祿七年十一月、壽六十をもつて寂しました。墓は上伊勢畑那珂川に近き景勝の地に在ります。珍しき形の自然石一基、碑面に

寺の名は白馬寺(天神林)



墓の尙和山連

「前永平二十二世連山交易大和尚」と刻してあります。近年、青年會に依つて玉垣が建設されました。

一六 蓮田東三

伊勢畑村下伊勢畑、蓮田重衛門氏の二男であります。兄を善九郎といひます。早く國事に參加して、湊の戦争に出て、捕へられて佃島つくだじまに幽せられました。明治二十三年、兩陛下水戸行幸啓の砌みぎ召されて、皇后陛下に拜謁を賜つたと申します。

東三氏もまた兄に劣らぬ忠烈の士であります。安政四年同志と江戸に赴き、外人の横暴を眼のあたり見て、國威を回復すべく心を砕いて居りましたが、遂に捕へられて獄に投ぜられました。翌年正月、病を獲て遂に獄中に死しました。年僅かに二十二歳、散る花の齡よばいは何れも短いものであります。明治四十四年、その愛國の至情を思召されとくに從五位を追贈せられました。獄中より故郷の姉に寄せた歌のうち

若櫻をしくもちる

武藏野に千筋の道はかずあれど

我が行く道は益良雄の道

一七 香川敬三伯

維新前後、我が郷土の人で國事に盡し忠節を致した者は澤山ありますが、多くは中道にたふれ

刑及に死して、餘憤を留めませんでした。獨り伯爵香川敬三氏のみは、幾度か死生の間を往來して、しかも明治の朝廷に奉仕し、功業位勳並ぶ者がありません。

伯爵は下伊勢畑、蓮田重



香川敬三伯

明治の朝廷に仕へまつる

衛門氏の三男、善九郎、東三はその兄であります。早く藤田東湖の門に入り教をうけてあけくれ國事を念として居りました。萬延元年、水戸

藩に勅諭返納問題起るや、氏は同志と共に極力、その不可を論じて罪せられ、禁錮さるゝこと數年に及びました。後藩主慶篤侯に随つて京都に抵り、公卿諸侯、志士の間を周旋して盛に尊王を唱ひました。この頃、おのが髪をきつて之を故郷に送り

黒髪のかゝる亂れの世にしあれば

死してののちの片見ともみよ

との和歌を書添へて、再び故山に歸らざるの覺悟を示しました。

やがて大政皇室に還り明治維新となつたけれども、東北の諸藩順逆をあやまり、戦亂總野の間に起るや、氏は深く之れを憂へて、單身敵營に到りその將近藤勇を誘致して、戦禍を大ならしめなかつた如き、偉大なる功績であります。東北平定するや軍務官に任ぜられ、つ

風香舎

香川敬三氏の書

いで宮内權大丞兼内舍人長となりました。之れ氏が宮内官たるのはじめであります。その忠誠常侍一日の如く、皇室の御信任も極めて厚く、累進して皇后宮太夫となりました。そして子爵より伯爵に進み、正二位勳一等に叙せられ、大正四年三月疾篤きに及び、從一位に陞叙せられ、十八日遂に薨じました。年七十七歳、嗣子を櫻男氏といひます。現に陸軍歩兵佐官であります。

嘗て 皇后宮(昭憲皇太后)のお供をして、後醍醐天皇の陵に詣てたときの和歌に

そのかみに我れもありせば 大君の

しこの御楯とならましものを

一八 その他の人々

以上は明治維新前後主として國事に盡した人々であります。記して傳ふべき者はこのほかまだ澤山あります。

飯富村の園部重裕、小松村の袴塚三右衛門、同達、興野介太郎、同金平、富

縣會議員

永魁四郎、西郷村の鯉淵龜太郎、杉山常之介、石塚町の瀬谷彌八郎、岩船村の加藤木峻、高須彦介、坪村の飯田信弘、伊勢畑村の青木源之介、富田惣七郎、蓮田徳三郎、疋田政平、同孝太郎などの人々、或は維新の國事にも奔走し、或は維新後の地方自治にも預り、或は地方産業の開發にも心をくだき郷土の爲に盡した功績は尠くありません。

貴族院議員

縣會議員に當選し、進んで縣政にも貢獻した人には、石塚町に飯村任藏、一木豊之介、宮田徳明、西郷村に綿引精貞、坪村に大森藤十郎、同信敬、飯村泰之介、廣木萬之介などの諸氏があります。

衆議院議員はまだありませんが、現存の人で嘗て貴族院議員たりし人があります。

神職

神職には澤山村に徳宿幹顯氏がありました。父祖以來四百年に亘つて阿波山上神社の祠官をつとめ、維新の際には伯父齋藤監物の志を紹ぎ出て、國事にもつくしました。

教育家

教育家には石塚小學校長に岡崎金次郎氏がありました。地方の教

軍人

育につくすこと三十年、しばしば縣竝に文部大臣の選奨をうけ、遂には叙勳の光榮にも浴しましたが、在職中逝きました。教をうけた人々の力に依つて建てられた頌徳碑が氏の功績を物語つてをります。

軍人には澤山村に少尉金長誠忠氏がありました。教導團を出て、下士より士官に進み、日露戦役には第三軍に従つて旅順の要塞で重傷を負ひ、戦後は滿鮮の地に活動を續けてゐましたが、遂に病を獲て逝きました。岩船村の伍長掛札鐵之介氏は、日露の役に敵状偵察の命をうけ、血染の白襯衣としてその勇名をうたはれをした。坪村の上等兵今瀬藤五郎氏は、近く滿洲事變に際し、重傷にも屈せず敵三名までも突きたふし、朱に染つた懐中の金子をば、戦友に托して之れを郷里青年教育の資に寄附することを遺言し、かすれ行く聲をはりあげて「天皇陛下萬歳」を叫びつゝ、瞑目したといふ青年軍人の花々しい最後は、實に郷土青年の花であります。

このほか

このほか、畫家、力士、篤農家として名を知られた者も澤山ありますが、

一々誌すことを略します。

右、二章にあげた人々は、何れも故人であり、過去の人であります。併し、我等の忘れてならぬ人々は、現在活動して居る人々のうちにも澤山あります。郷土の自治行政を掌つてをる人、教育事業に従事してゐる人、事業を起し産業に勵んでゐる人、出で、官吏となり軍人となつてをる人、篤行のかどに依つて表彰の榮に浴してゐる人。これらの人々は、何れも皇國日本の尊い御柱であります。

皇國日本の御柱

辭世

松崎 熊藏

身を棄て、國をたてむと思ひしにたつをも待たで逝くぞ悲しき

述懐

黒澤 止幾子

衣手の常陸を出で、敷島のみちある御代をたつねきにけり

述懐

船橋 太郎衛門

見渡せば空にもはてのあるものをうきにはいかで限りなからむ

追 録

黒澤止幾子刀自が上京して、座田維貞を経て

天聽に訴へた愁訴述懐の長歌 (本文参照)

千早ぶる 神代の昔、神々の 鎮め給へし 秋津島、げにも尊き
日の本の、清き光は 古へも、今も千とせの 末までも、かはら
ぬ君が御代なるを、かくとは いざやしら波の、寄せ來る毎に
異國の、ことうき船の えみしらが、強ゆる願を つどくくに、
承け引く 國のあやまちは、井伊といふ士の 心から、御國の
おもものはみながら おさくしくも 思ほえず、あやなくまどふ
ぬば玉の、心のやみの くらかりし、黒き 間部を 語らひて、
いさをしあれど とがのなき、かしこき君を 押こめて、黄金の
色を 山吹の、花散るごとに まきちらし、おもき雲井を 恐れ
なき たくみの程ぞ あさましき。淺きたくみも 自ら うきよ

の人の 言の葉に、かゝる悪事を 傳へきく、身は下ながら 天
 照らす、神の御末を くみてしる、いさをし ありし 藤原の、
 流の末の我なれば、聞きすてならず 年たけて 五つの四つに
 なりぬれど、七十路三つの 母そばの、老のよはひを 見まほし
 と、教への 道を わざとして、細きけふりの たちゐよく 朝
 な夕なに 仕へしも、ことを つばらに 語らひて 暫しの い
 とま こひければ、ともに心を 添えられて、御國の爲めに 時
 を得ば、早やとく行けと、老らくの 言葉も すぐに 力草、露
 をふくみし 朝ぼらけ、日も立ち出つる 衣手の、常陸を出て、
 敷島の、道ある御代を 慕ひつゝ、杖を力の旅のそら、たどるも
 君が 御代のため、思ひ續けし 老が身の、矢たけ心は、春の野
 を、行くもかへるも 梓弓、はるけき道を、さゝかにの、糸も
 たゆまず 引はえて、登る思ひは あまざかる、ひなに生れし
 ちりの身の、ちり積るてふ 山の井の、深き心の みなもとは、

流れて清き 丸水の、中にすみぬる 魚心、つたなき身をも 忘
 れつゝ、御國の爲と 朝夕に、千々に 心は碎けども、たゞひと
 すちに 行く水の、せみの小川に みそぎして、はるくゝ來ぬる
 旅ごろも、あかつきながら うぐひすの、はつ音の 今日のこと
 とぶきや、野末に匂ふ、梅が香を、天つ空まで つたへあげ、恐
 れ多くも 久方の 雲井の 庭にぬかづきて かしこみくゝ つ
 ゝしみて、まをす言の葉 奉るなり。

返し歌

よろつ代を照らす光りのます鏡

さやかにうつす賤がまごゝろ

あつさ弓はるけき路を笹かのに

糸もたゆまず雲の上まで

清見がたきよらに澄める有明の

月にくらべん日本心を

玉鉾の道は荒れても進み行く
 日本心の駒はたゆまじ
 衣手の常陸を出て、敷島の
 みちある御代をたつねてぞとふ
 安政六年未の三月

黒澤李恭頓首再拜

後 篇

第一 郷土の自然

一 位置と區域

水戸市から西北へ向つて、那珂川に近く一條の縣道が走ります。今この縣道を進んで歩兵第二聯隊を右に見、金澤坂を下りると飯富村となり、藤井川を渡り寶幢院坂を上ると石塚町となります。飯富村の西には小松村、石塚町の西には西郷村が、それ／＼石塚町から分岐する縣道の左右にあります。

石塚町から手這坂を下りると坪村となり、更らに進めば澤山村となります。岩船村は澤山村の西に、伊勢畑村は澤山村の北西にあつて、どちらも稍々山村になつて居ります。

この一町七ヶ村。こゝが即ち東茨城郡北部地方といはれる私共の

郷土で、歴史、地勢、産業、交通等互に深い関係を有する一地域であります。

二 地勢

阿武隈山脈の餘派たる八溝山脈は、栃木、茨城の縣界を南西に走り、一度那珂川に横斷されて東茨城郡に入り、伊勢畑、澤山、岩船、西郷の各村を経て西茨城郡に進み、南に走つて足尾、加波、筑波の諸山を起して關東平野の間に没します。

我が郷土は、この山地と那珂川右岸の平地との地域を占めて居ります。即ち飯富、石塚、澤山の大部分と、坏村とは那珂川沿岸の平地に屬して、大體沖積層の土地であり、伊勢畑、岩船、西郷、小松の各村は主として山地若くは臺地になつてをり、耕地は溪流に沿うて發達してをります。

三 山と河

郷土の山河は、現在に於ては皆様の楽しい遊び場であります。蔵採るべく小山に登ることもありませう。小鮎を釣らうと小川に行くこともありませう。併し十年後、二十年後の山河は、皆様にとつては實生

ふるさとの山河

活の舞臺であり、奮闘の戰場であります。若し夫れ故郷をはなれて、遠く暮す人々よりみれば、愛憐、思慕の情絶ち難いものとなります。私共は、富士山を愛し、利根川を忘れぬと同様に、郷土の山河に心を動かさぬ譯にはいきません。

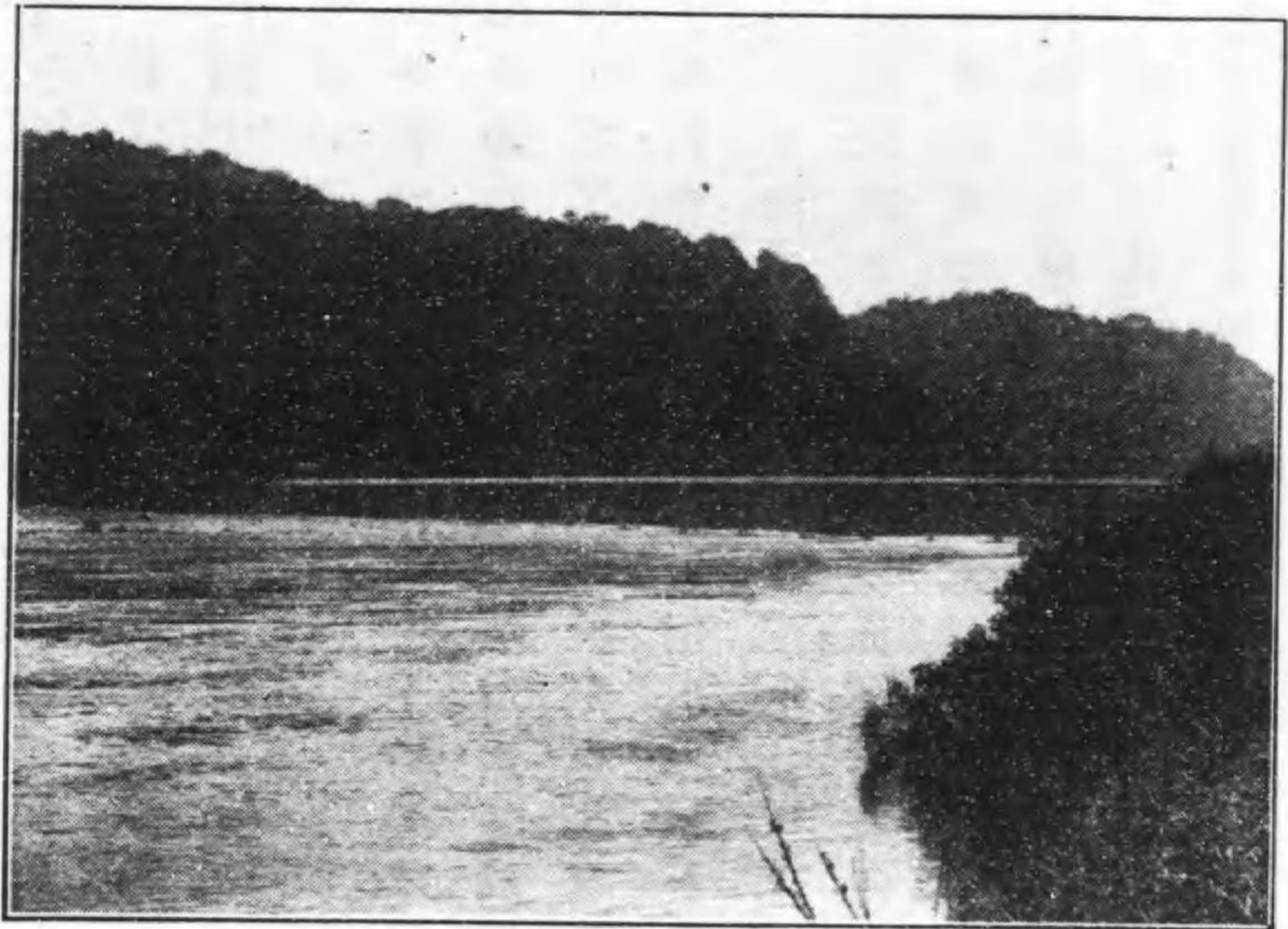
井殿山

井殿山 伊勢畑村大字下伊勢畑、相川の流に沿うて約三軒、遂に井殿山に達します。明治維新前までは觀音堂、大日堂、鐘樓なども備つてあつたさうですが、今はさゝやかなお社が、緑深い山の頂に祀られてあるばかりです。山の麓に相川温泉があります。弘法大師の遺蹟と傳へられてゐます。高さは三百十七米。

御前山

御前山 澤山村大字赤澤に在ります。削つたやうな絶壁、晝も小暗い深林、深さも知れぬ大渦卷、玉を流したやうな溪流、さては春の若葉に秋の紅葉、麓の那珂川には白帆が走り、峯の松には白雲が去來する。一の堀、二の堀、鐘撞堂、本丸跡などの名蹟は、何となしに私共の懐古の情をそゝり、名も知れぬ珍草奇木はひとりてに私共をして採集研究の心を

白山



御前山

起させます。棧道を傳ひながらに絶壁を見上げたり、深淵を見下すのもよく、麓の光戸川邊をそゞろいて水車の音に耳を傾けるのも趣があります。對岸なる那珂郡野口村に渡る那珂川橋の上からの山の姿は、京都の嵐山にも劣らないといはれて居ります。

白山 御前山の南にあります。頂上なる白山神社の眺望のよいことはすでに前篇に書きました。高さは御前山よりやゝ高く百七十米ばかりあり

赤澤富士

ます。

赤澤富士 一に眉山（たけの）ともいひます。白山の西に一段高く聳え、山の形がちやうど人の眉のやうだといはれておましたが、植林の結果今ではよほどかはりました。高さは二百七十五米であります。

住谷愛宕山

住谷愛宕山 岩船村にあります。赤澤富士の南西約三軒ばかり、澤山の平地から眺めると、二山相並んで美しい山の姿を見せておます。高さは三百三米。山の麓には、文明の昔大掾氏の一族が、江戸氏大山氏の爲めに滅されたとき、老臣が主人の遺児を擁して匿れておたと傳へられる、遺跡があります。

妙義山

妙義山 西郷村大字春園にあります。さほど高くはありませんが、「峨々たる巖つらなりて」と唱歌にある群馬縣の妙義山に似ておるといはれておます。

朝房山

朝房山 西郷、小松の二村と西茨城郡大池田村との境にあります。常陸風土記に物語のある晡臥山といふのはこの山のことだらうかと

その他の山々

いはれてゐます。高さは二百一米であります。その他の山々 伊勢畑、澤山、岩船、西郷、小松などには百米から二百米位の山がいくつもあります。何れも松、杉、檜などよく茂つて、溪流の水源をなし、麓からは炭焼く煙が静かになびき、だんだら坂の木かげからは、草刈馬の鈴の音が聞えてくることもあります。

那珂川

那珂川 常陸第一の川で、古くは粟川ともいつたさうです。下野國那須谷の水を集めて南へ流れ、東に折れて常陸に入り、東茨城、那珂二郡の界を成して海に注ぎます。全長約百二十軒、本縣内の流路四十九軒五分といはれます。昔は下野の物資を常陸に運び、更らに江戸に送る水路に當つてをり、沿岸所々に河岸と呼んで荷物を扱ふ回漕所がありました。阿波山河岸、坏河岸、上泉河岸の名は即ちその名残であります。鐵道が通じ自動車が行るに及んでは、水路としての價値は少くなりましたが、それでも時々、或は桑畑の茂みの中から、或は麥の穂波の上から、折柄の東風をうけて流をさかのぼる白帆のかけを見ることがあります。

藤井川

す。

藤井川 古くは入野川と呼ばれました。西茨城郡七會村から、谷々の水を集めて西郷村に入り、古内川となり龍潭淵の勝景をなして小松村に去り、飯富村で那珂川に注ぎます。昔は水量も豊かで魚類も多かつたさうです。藤井川水力電氣會社は西郷村にあり、發電所を小松村に設け近村一帯に送電してゐます。

その他の小川

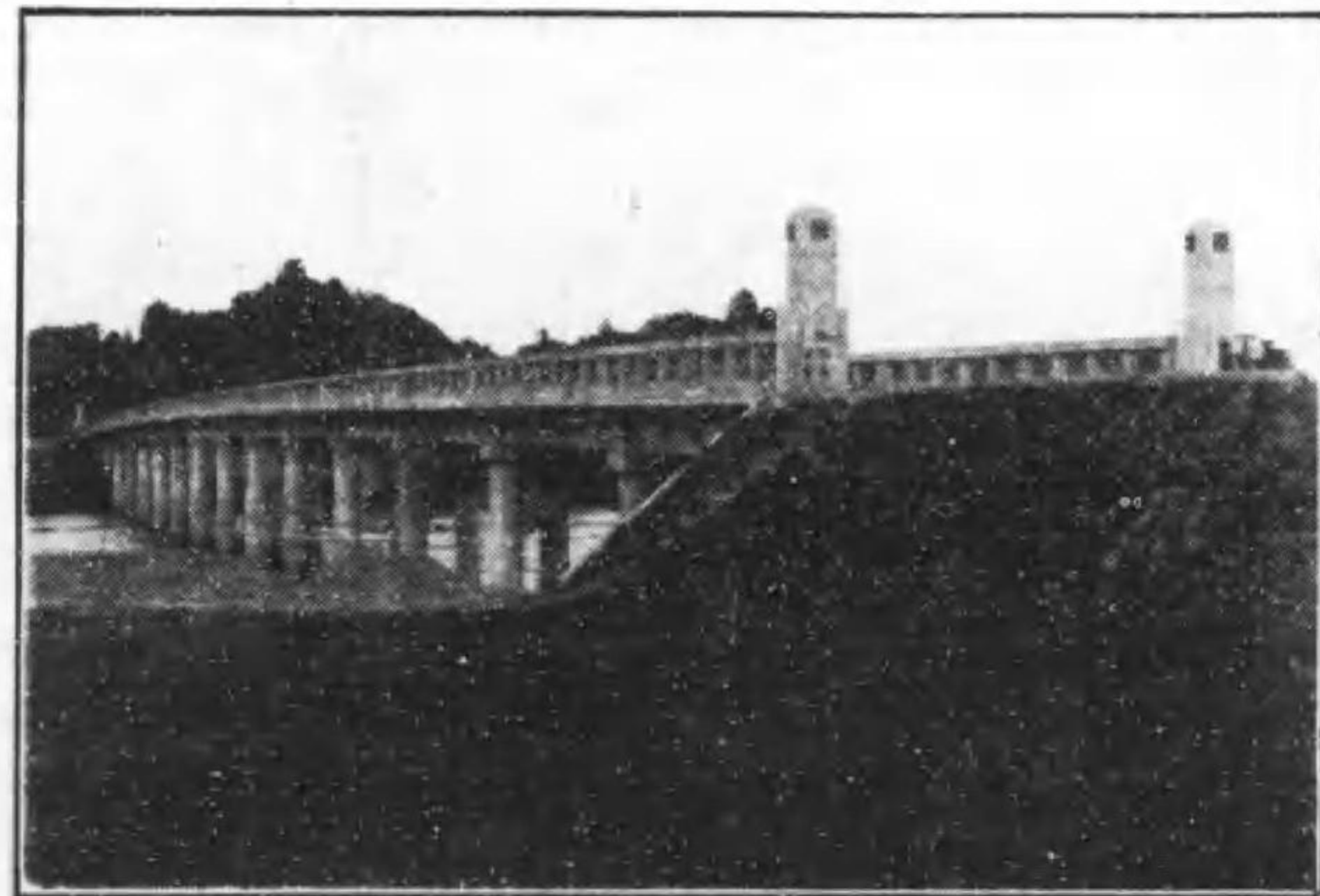
その他の小川 相川は井殿山の奥より發し、光戸川は御前山の麓を流れ、桂澤は一に西川ともいつて岩船村から阿波山を経て坏に至り、根小屋川は春園、高久の水を集めて石塚手這坂の下を流れ、新川は山根村を出て、飯富村に至りひとしく那珂川に合します。何れもさゝやかな流に過ぎませんけれども、兩岸には美しい田畑がひらけ、春はれんげ草の花みごとに、夏は早乙女の田植歌も面白く、秋は見渡す限り黄金色に實つた田面から朗かな笑聲を聞くこともできます。柳のかけでは小鮒が釣れるし、水の澱では泳ぎもできます。

橋の觀察 谷間の水は、薪を貢うたおばあさんでさへ、かけ聲一つで跨ぎます。田圃の小川は、稻負馬も脚をひたして涉ります。野をめぐり里を流れて、水がだんく多くなると、人はそこへ橋を架けます。たゞ一本の丸木橋、二枚並べたペコく橋、車の通れる板橋、土橋、さては欄干をつけ橋柱を造り、「何々橋」「何年何月成」など、書きつけた縣道筋の立派な橋、水の流にしたがつてそれく趣がかはつて來ます。何故これといか、何故かうせねばならぬかは皆様の研究に任せませう。

重なる橋の一覽表

橋名	所在	道路	長さ	構造	工費	竣工
那珂川橋	澤山、野口間	水戸、烏山線	二五二米	木	七九五六二圓	大正十三年
光戸橋	澤山村	同	一二米	木		昭和三年
かつら橋	坪村	同	一〇米	木、土		昭和五年
新橋	飯富村	同	八米	欄干、鐵		明治四十三年
千代橋	坪、戸多間	石塚、太田線	二〇八米	鐵筋コンクリート	七一七〇九圓	昭和六年
青山橋	西郷村	石塚、笠間線	九米	木		昭和二年
古内橋	同	同	二一、四米	木		大正十四年
御陣屋橋	小松村	村道	一〇米	木		
大橋	飯富村	水戸、烏山線	三二米	木		大正十四年
古城橋	澤山村	澤山、岩船線	一〇米	木		
梅が門橋	西郷村	水戸、宇都宮線	一二米	木		昭和八年
小松橋	小松村	内原、石塚線	一〇米	木		

里川のほとりに立ちて——私は今里川のほとりに立つてをります。春とは名ばかりで、草も木も森も林も、一面に冬枯の景色です。天外より吹きおろす風は、廣い野原をか



千代橋全景

けて行つてやがてはまたどこもなく空のあなたに消えてしまひます。眞晝の太陽は静かにその行方を眺めながら音もなく永遠の旅を続けてをります。遠くで犬の鳴く聲が聞えます。脚もときには里の小川が小さいせゝらぎを立てゝさらさらと流れてをります。

——中村孝也

第二郷土の産業

一 職業別戸數

私共の郷土が農村であることは、誰も知つてをりますが、念の爲め職業別にその戸數を調べてみませう。

(昭和九年四月)

町村名	總戸數	農	商	工	漁	其	他
飯富	五五九	四六五	七	一〇	一		七七
石塚	九一三	四六〇	三三八	三八	三		七七
小松	四九七	四七一	一九	五	二		一

西郷	環	岩船	澤山	伊勢畑
六八二	四九二	六八〇	五五四	三二五
五七四	四二九	五六五	四五七	三〇八
二五	三四	二五	八一	一三
三	一	一	二	一
一	一	一	五	一
八〇	二九	八九	九	三

これによつてみると、石塚町ですら過半は農家であります。即ち我が郷土は農を以つて生活の基礎としてゐることがよくわかります。なほ昭和六年の調査で、本縣の農家戸數は總戸數の六割七分を占め、本郡は七割〇分五厘に當つてをります。皆様は、前の表によつて自分の町村の歩合を算出して御覽なさい。

二 土地

次に郷土の土地が如何に利用されてあるかを調べませう。

(昭和八年四月)

町村名	単位ヘクタール			単位		
	田	畑	山林	田	畑	山林
飯富	八三、三	四九、〇	九八、八	八四、七	四九、五	九八、〇
石塚	二四、一	四三、七	二二、五	二五、〇	四三、七	二二、九
小松	一七、八	二五、六	二二、〇	一八、一	二五、八	二二、八
西郷	二五、五	三九、〇	一〇〇、九	三六、九	三二、五	一〇六、四
坪	一三、九	二六、八	一五、〇	二二、六	二六、〇	一一、〇
岩船	一五、六	三九、五	七八、九	一七、六	三九、七	七五、〇
澤山	二九、一	二六、五	三六、一	二〇、〇	三〇、六	三六、六
伊勢畑	二六、一	二二、六	四三、二	二六、元	二二、三	四六、二

各町村とも、それ〴〵差異のあることに気がつきませう。飯富村は割合に田と山林が少なくて畑の多いこと、西郷村に山林の非常に多いこと、坪村がその反対なこと、伊勢畑村に田の少いことなどが目立ちませう。

三 生産物

その一

(昭和九年四月)

前表の土地から、どんな物が産み出されるかを見ませう。

町村名	水	稻	石	陸	稻	大	麦	小	麦	大	豆	蒭
飯富	一六六	一九四	一八六	二八七	二四九	五三	五三	七四四	五三	二四九	五三	五三
石塚	三四四	一四二	一六六	三六四	三六四	五三	五三	七四四	五三	二四九	五三	五三
小松	二七九	八三	一〇五	八七	八七	六	六	一四九	六	一四九	六	六
西郷	三五元	七三	三三〇	一七四	一七四	一九	一九	一八四	一九	一八四	一九	一九
坪	二五四	二二	二八五	二〇七	二〇七	二二〇	二二〇	五九二	二二〇	五九二	二二〇	二二〇
岩船	三六三	一〇五	三三	四三六	四三六	三三	三三	二七二	三三	二七二	三三	三三
澤山	二六三	二八三	六三	一四六	一四六	一	一	八三	一	八三	一	一
伊勢畑	五五	五〇	一五七	一八四	一八四	一八	一八	三二	一八	三二	一八	一八

その二

町村名	葉煙草	茶	木	炭	木	材	石	材	水産物
飯富	六〇〇〇	三〇〇	五〇〇	—	—	—	—	—	一四六
石塚	六四元	一七二	—	—	—	—	—	—	—

農業の多角的
經營

米穀をのみ主とする農業は、收穫は多いやうでも生活の基礎としては安心が出来ません。米麥作と煙草作若くは養蠶を併せ行つてやつと安定の見込が立ちます。之れに適當な園藝畜産を加へてはじめて安心がつくのです。けれども更らに進んで家庭加工を施し、それらに對して販賣、出荷の統制を行ふやうにならなければ、農家の生活を幸福にし、農村の繁榮を期することは出来ません。各種の産業組合、農業倉庫、生産検査等の制度は皆この目的に副ふべく運用することが大切です。

小松	五〇六圓	二六圓	—	—	—	—
西郷	三九二五	一七	六五〇	四五〇圓	二六〇才	—
坪	七〇〇	五	—	—	—	五〇
岩船	一四八四疋	1100x	1200x	1130石	1200才	100x
澤山	一八三三	—	四〇〇	—	—	七五
伊勢畑	一七六三	二〇	一六〇〇	七〇石	—	四七圓

四 特産物

農産物中及び農家の副業に依つて産する特産物を擧ぐれば次のやうです。

町村名	品名	価格	摘	要
飯富	午莠	三〇七四〇圓	品質が良いので、京阪地方へまで移出される。	
西郷	石材	二〇〇〇圓	主として古内より産す、古くは春園からも産しました。	
坪	栗野塗	二五〇〇〇圓	延徳年間、稻川山城守が發明したもの、能代塗の自家です。	
岩船	石材	一〇〇〇圓	元祿年間より採掘、三十年以前は最も販路が廣かつた。	
岩船	重石	五一疋	高取鑛山より産す、今は事業をやめておる。	
坪、澤山	鮎	八〇〇〇圓	本村地内のものが最もうまい、そして多くとれる。	
各町村	栗	三〇〇〇〇圓	近來、東京へ出荷するやうになつた。	

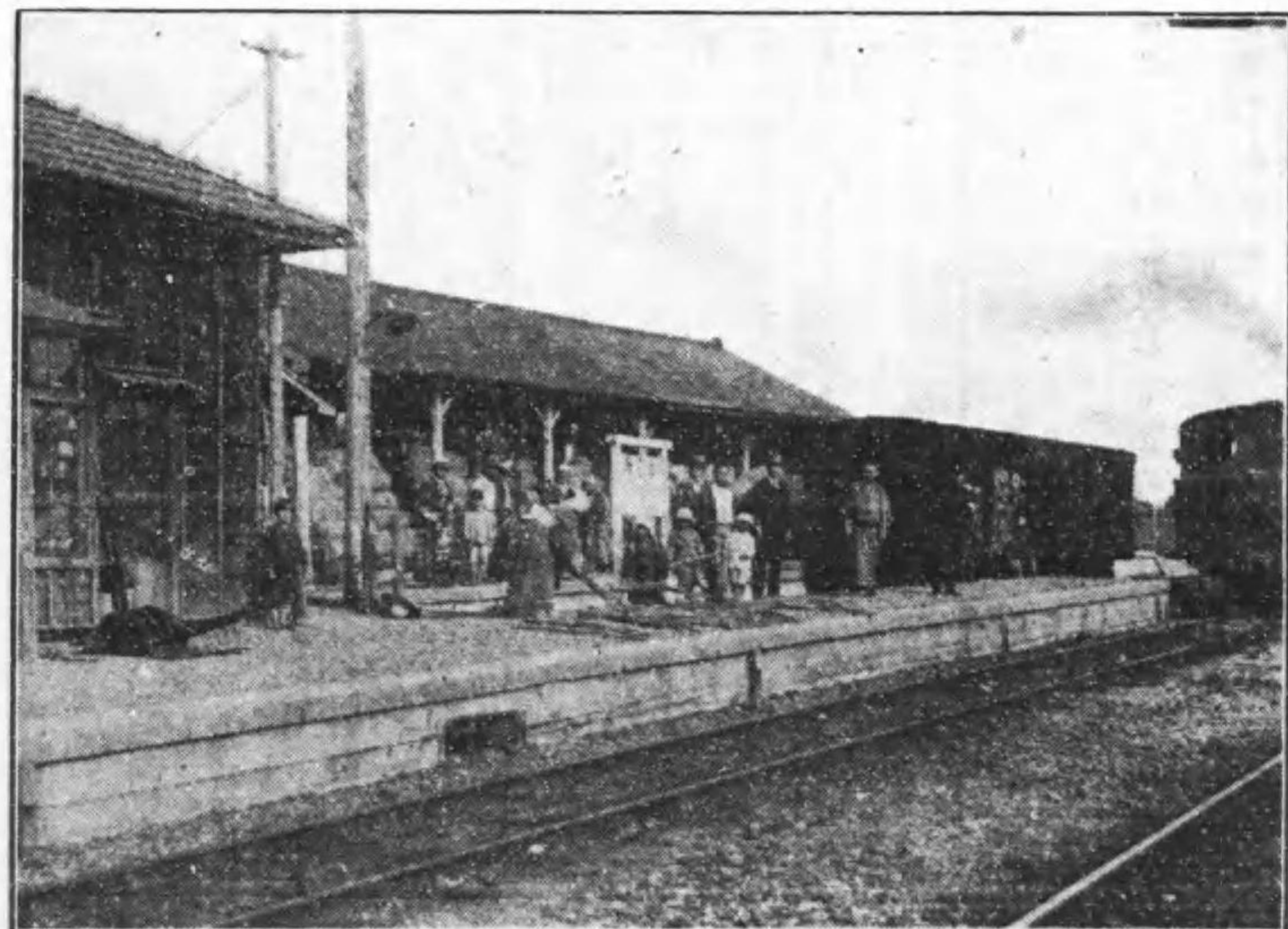
麥ふみ——私は麥踏が好きなので、日曜には一人でよく畑に出かけたものです。麥を踏んでゐると私は楽しく、そしてなんと悲しく寂しくなる。足袋を通して足の裏にくる麥の葉の感觸が、少年の心に淡い悲しみをそゝる。春の暖い雨がふつて踏まれ

た麦の葉が更にいき／＼と起き
かへつてゐるさまを見ると、私は
學校がへりの下駄を畦に脱ぎす
て、その濡れた冷たい麦を更ら
に踏んで見る。——前田夕暮

五 商業

専業と副業

商業を専業とする家は、石塚
町大字石塚に最も多く、次は澤
山村大字阿波山に多少あるの
みで、その他は農家の片手間に
行ふばかりであります。何故、
副業的の商家が多くて専一に
營む商家が少いでせう。その



飯富村午勞出荷狀況

商業の種類

わけを考へてみなさい。

一概に商業といつても、日用品を賣る店、食用品を賣る店、製造と販賣
とを兼ねてゐる店、仕入品をのみ賣る商店、仲買店、卸商などいろ／＼あ
ります。また店賣もあれば行商もあり配達するのもある。農村にさ
へ米屋や野菜屋のあることや、何處へ行つても酒屋と煙草屋のあるこ
とや、飲食店、料理店、カフェーなどの業態、觀察すべきことはいくらもあ
ります。

旅人宿

十年前、二十年前までは、所々にあつた旅人宿が、近頃は殆どなくなり
ました。之れは主として何に原因することとせう。今、やつと營業を
續けてゐる宿屋はどんな人を泊めてゐるでせうか。

銀行

銀行は、石塚町に常磐銀行の支店があります。どんな業務をしてゐ
ますか、人は之れをどんなことに利用してゐますか。これもよく考へ
て御覽なさい。

六 漁業

漁業組合

漁業の生業として行れるのは、殆ど那珂川沿岸に限つてゐます。那珂川には沿岸一帯を區域とする漁業組合の設もあり、漁法の改良、魚族の保護などにつとめてゐます。

鮎あゆを獲るには、友釣ともづり、引かけ釣、鮭には居繰網かまづり、ぶんまはし。その他雑漁には、うち網もあれば、すくひ網も使ふ、うなは曳うなはひといふのもあれば、鰯いわし押しなどといふ面白い漁法もある。

明治天皇御製 産みなさぬものなしといふあらがねの土はこの世の母にぞありける

小山田のさとのけぶりもとしくにたちそふ世こそ樂しかりけれ

第三郷土の人口

我々大和民族の数は、明治の中頃に於て三千万といはれてゐました。皆様のお父様が子供の時歌つた唱歌に「三千餘萬の兄弟あにがたどもよ、守りに守れ君が代を」といふのがありました。それが現在では皆様も知つての通り内地の人口のみで六千萬を超えてゐるではありませんか。

年々に榮え増す民草

それと同様に、郷土の人口も年々増加してきました。

一 各町村別現住人口

町村名	明治廿五年	大正九年	大正十四年	昭和五年	昭和七年	昭和九年
飯富	二四二五	二六二二	二七二四	二七九〇	二八二五	三〇〇九
石塚	二六一	三九九	三三三	四三三	四八三	四九三
小松	二〇〇	二六四	三三三	三三五	三八	—
西郷	一五九五	三〇〇	三三三	三八五	三〇七	三三三
坪	二九九	三三三	三〇一	二八四	三〇五	三三〇
岩船	二七四	三三三	三三三	三七九	三九六	四三三
澤山	二〇二	二〇〇	二八四	二五九	二六〇	二五九
伊勢畑	一三五	一六三	一七四	一六二	一七四	一八〇

明治二十五年は、約四十年前であります。その年の人口を最近の人口と比較して考へて御覽なさい。更らに大正九年以後、五ヶ年毎の人口増減の状況をよく觀察して下さい。そしてその増減の事情が主と

して何に依るかを研究して御覽なさい。

二 出寄留及び海外移住

本籍を郷土に有し、業務の爲めに他町村、新領土、外國へ行つて働いてゐる者が澤山あります。昭和九年の調に依ると

町村名	内地へ		台湾へ		北海道 樺太へ		朝鮮へ		滿洲へ		支那へ		北米へ		南米へ		軍隊
	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	
飯富	四九〇	六五	六	一	六	一〇	一	四	四	二	一	一	一	三	三	モ	
石塚	二二九	一六〇	六	六	五	五	四	四	四	二	一	一	一	一	一	?	
小松	一四三	一六〇	一八	三	三	五	二	二	三	三	一	一	一	一	一	三	
西郷	二六	二六	五	五	五	五	四	四	四	二	一	一	一	一	一	三	
岩船	二六	二六	五	五	五	五	四	四	四	二	一	一	一	一	一	三	
澤山	二六	二六	五	五	五	五	四	四	四	二	一	一	一	一	一	三	
伊勢畑	六六	六六	六	六	六	六	三	三	三	一	一	一	一	一	一	三	

この表を讀んで、どんなことに氣がつかますか。飯富村の在外者は、

海外發展

割合に少くて、坪村は多い様です。伊勢畑村の在外者も多い方です。これらは何にもとづくでせう。海外移住者は、各町村とも非常に少いですね。岩船村だけが少々多いのは愉快に感じます。併し日本の將來を思ふと組織的なそして永久的な海外移住を期待せぬわけには行きません。「人間到る處に青山あり、骨を埋る豈に墳墓の地のみならん。」「行け一家を擧げて海外へ。」日の照る限り日の御旗私共は事情の許す限り海外發展の精神を發揚したいと思ひます。

三 年齢別現住人口

現住人口の年齢構成を調べることは、衛生、産業、國防等の上からみて大切なことであります。今、大正十四年の現住人口に就いて調べてみませう。

町村名	現住者總數	十四歳以下				十五歳乃至十九歳		六十歳以上	
		飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚	飯富	石塚
飯富	二七二四	一〇一九	一四六三	一九六二	二九八	二九八	二九八	二九八	
石塚	三七二三	一〇一九	一四六三	一九六二	二九八	二九八	二九八	二九八	

伊勢畑	澤山	岩船	坏郷	西郷	小松
一六七四	二二八四	三二一二	二〇九一	三一八三	二二二三
六七一	八五七	一二五一	七九一	一二三六	九一〇
八二八	一一七四	一五一一	一〇六三	一六一三	一〇八三
一七五	二五三	三五〇	一三三七	三三四	二二三〇

幼少年及び老年者の多いことは、育兒、衛生の上よりみて慶すべきこととてありますが、壯年者即ち生産者の多少は、産業、國防の点より考へて重大なる關係を持つものであります。

なほ研究してみたいのは、出生と死亡との關係であります。皆様は少し注意すると、皆様の大字若くは一部落に就いて正確な調査が出来ます。その方法はまつ調査區域を一大字とか一部落とかに限定します。次に

1、區域内の現住人口を調べ

2、その後一年間に於ける出生數を調べます

3、同様にして死亡數を調べます

4、そして出生と死亡とを比較して差を求めます

5、その差をば千を單位とした現住人口の數字で割ります

割つて求め得た數は、即ち人口千に對する増加率であります。この調査を年々繰返し、或は順次他部落他大字に及ぼし、それを日本全國、若くは本縣の分と比較してみなさい。その間に色々の知識と教訓とが得られます。

年次	本縣			内			地		
	出生	死亡	差引増	出生	死亡	差引増	出生	死亡	差引増
昭和四年	三三、二〇	一九、四三	一三、七七	三四、八〇	二〇、〇〇	一四、八〇			
昭和五年	三六、八八	一九、五四	一七、三四						
昭和六年				三三、一六	一八、九八	一三、〇八			
昭和七年				三二、九二	一七、七三	一五、二〇			

(右何れも人口千に對する割合)

明治天皇御製 千萬の民のちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける
あしはらの國とまさむと思ふにも青人草ぞ寶なりける

第四 郷土の生活

一 子供の生活

生れた時のことをいつたら皆様お笑ひになるでせうが、私共が明い世界へ生れてから、小學校へ入學するまで、その間お父様の御心配、お母様のお世話は一通ではありません。「這へば立て立てば歩めと親心。」

明治天皇御製
かたはらに眠
るうなむば夏
草をかるしづ
の女のうまご
なるなむ

「そらあぶないほら轉ぶぞとあとを追ひ。」
町へ物賣る野菜車の上にも赤ん坊の眠つてゐることがあり、一家總出の田植には畝道の草の中に、古い乳母車の置かれることがあります。「ふりむくは泣く子の親か田植笠」
かういふやうに私共は育つて來ました。以前は他所から子守を雇つて置いた家もありましたが、今ではだん／＼それも尠くなつてきま

した。ですからお母様のお骨折は一通ではありません。夏の日、子供を負ぶして草取などをしてゐる若いお母さまのお姿を見ると、有り難いやらお氣の毒やら、親の恩の深いことがしみ／＼と感じられます。「負うた子に髪ねぶられる暑かな。」

二 教育、教化

入學式が近づくと、どこの子供もうれしくて／＼てなりません。四月一日が待ち遠いやうです。やがていよいよその日になります。着かへた着物のさつぱりさ、新しいカバンに新しい帽子、手拭、鼻紙もキチンとたゝんで、お父様お母様に手をひかれたときのうれしさ、はづかしさ。仲よしのポチもお供をしてくれます。

小學校 小學校の設けられたのは、學制頒布以後のこととあります。その後、修業年限や學科目などもいろ／＼にかはりました。明治四十年以後は義務教育の年限も六年と定まり、學科目も現在のやうになりました。

入學式

小學校

實業補習學校

校名	學級	生徒		職員	職員	經常費		備考
		男	女			男	女	
飯富尋常高等小學校	二九	四七	一八	二	一	九〇	八四	
石塚尋常高等小學校	一四	七二	二四	二	一	四九	五三	
小松尋常高等小學校	二六	二五	二四	二	一	六四	三五	
西郷尋常高等小學校	二六	二七	二九	二	一	六六	〇〇	
西郷尋常小學校	六	二七	九	二	一	五〇	六九	
坏尋常高等小學校	二六	三七	七八	二	一	六五	九五	
岩船尋常高等小學校	一五	三三	六八	二	一	五五	六五	
北方尋常小學校	四	二〇	四	二	一	二九	八三	
澤山尋常高等小學校	二六	四一	九〇	二	一	六六	〇二	
伊勢畑尋常高等小學校	一三	一六	三四	二	一	三七	二五	
上伊勢畑尋常小學校	二	一〇	七	二	一	二一	〇四	

(昭和八年四月現在)

實業補習學校 小學校を卒業すると、大抵補習學校に入學します。冬季間(男子には夜間)授業する季節制のものと、一年を通じてする通年

制のものとあります。

(昭和八年四月現在)

青年訓練所

校名	學級	生徒		職員	職員	經常費		備考
		男	女			男	女	
飯富農業公民學校	三	四七	三四	一	一	一一	二一	甲通年
石塚農業公民學校	二	四七	三七	一	一	三〇	〇	乙季節制
小松農業公民學校	二	七五	四六	一	一	二八	一	同
西郷第一實業公民學校	三	七八	二七	一	一	一六	〇	同
西郷第二實業公民學校	二	一〇	八	一	一	一五	〇	同
坏農業公民學校	二	四二	四二	一	一	一九	〇	同
岩船農業公民學校	三	六二	八一	一	一	二五	九七	通年
澤山農業補習學校	二	三八	四三	一	一	三二	〇	外に季節制
伊勢畑農業公民學校	二	四〇	三〇	一	一	一四	〇	同

青年訓練所 青年訓練所は、青年の心身を鍛練し、國民たる資質を向上せしめようとする機關で、これも各町村毎に設けられてあります。皆様は、時々小學校の運動場で、茶褐色の制服に武装した勇ましい青年の

軍人姿をみることはありません。あれが即ち青年の教練であります。普通科の指導は小學校の先生がなさいますが、教練に限つて在郷軍人の方が指導して居るのが多いやうです。

(昭和八年四月現在)

訓練所名	生徒	指導員兼任	經常費
飯富村立青年訓練所	四三	三四	四七〇
石塚町立青年訓練所	五二	二四	二九四
小松村立青年訓練所	五九	二三	五〇八
西郷村立青年訓練所	五七	三〇	四八九
坪村立青年訓練所	四三	一四	九五
岩船村立青年訓練所	七〇	三五	四一〇
澤山村立青年訓練所	二八	五	一五九
伊勢畑村立青年訓練所	二六	一四	一八四

青年團 明治四十一年、戊申詔書の御聖旨に感激して、各地に青年團の組織を見るやうになりました。その後、大正九年青年に賜つた皇

太子殿下の令旨を奉體し、更らに体容を改めて専ら知徳の修養を旨とするやうになりました。何れも一町村を單位とし、各大字に支部を置き、多くは小學校長を會長とし、小學校職員その他の人々の指導に依り、講演會、講習會、運動會、農産品評會、試作地經營、見學旅行等を行ひ、更らに公共事業や銃後運動等に從事してゐます。

町村名	男子青年會員數	女子青年會員數
飯富	一二一	九四
石塚	二六三	一四二
小松	一〇六	八〇
西郷	二七五	九六
坪	八五	六五
岩船	一八三	八四
澤山	一四〇	六〇
伊勢畑	七九	八〇

在郷軍人分會

在郷軍人分會 帝國在郷軍人會は、東京に本部を有し、畏くも皇族を總裁にいたゞき、各府縣に支部を、各町村に分會を有する、豫後備及び補充兵役に在る帝國軍人の團體であります。その目的は軍人精神を鍛練し、軍事能力を増進すると共に、教育、産業等一般の社會事業にも貢獻しようとするのであります。私共の町村にもそれ／＼分會の設けがあり、分會長を中心として會員一團となり各種の施設、活動を續けてみます。

その他の團體

その他の公益團體 郷土の人々は、更らに日本赤十字社、愛國婦人會及び其の他各種の團體に加盟して、その團體の事業を助成してゐる者が澤山あります。

三 交通

草鞋の旅

明治の中頃までは、誰も徒歩によつて交際、用達をしたものです。用事があつて水戸へ行かうといふ時には、昨夜自分で作つた草鞋をはき、握飯を腰にし、早天殘月を踏んで出かけました。ところが明治二十四

人力車

五年頃から、金輪の人力車が、ガラ／＼音を立て、砂利道を走るやうになりました。けれども多くの人々は、旅は道連れのとひとひの通り、世間話に疲れを忘れて草鞋の旅をつゞけました。

乗合馬車

明治三十七年頃、石塚谷中間に乗合馬車の營業がはじまり、まもなく澤山まで走ることになり、割合に早く女子供でも交通が出来ることになり、地方の人もポツ／＼利用するやうになりました。一人の馬丁を先立て、テト、テト／＼と小さなラツパの音が、松並木の間から流れてくると、村の子供等は遊をやめてかけ集りました。

自動車

その後、人力車の金輪は、空氣入のゴム輪に代りましたが、大正の初めから遂に自動車の警笛を聞くやうになり、やがて八九年の頃から水戸、石塚、水戸、川前(赤澤)間に定期數回の往復がはじまり、地方の交通機關に一大變化を來しました。

茨城鐵道

これと別に、我が地方に鐵道の敷設を計畫する者がありました。大正十二年に至り茨城鐵道株式會社の設立をみるに至りました。そし

て幾多の差障を突破して遂に大正十五年には赤塚・石塚間、翌昭和二年の春には石塚・御前山間の工事を完成し全線二十三軒一分の開通をみることになりました。

茨城鐵道運輸概況(昭和七年中)

停車場	乗車人員	降車人員	發送貨物	到着貨物
飯富	一四六二三	一四八五四	四七	二三
藤井	六五四〇	五四九九	四四二二	七三
那珂西	八一六四	五六七六	五七	一一
石塚	三六三二〇	二九七三四	二七三一	二九二三
岩船	六五四〇	五四九九	四六二	八九
阿波山	一四二八六	一三一九九	一四五	四五六
御前山	一五三七七	一二四三五	六一四	一二七七

(貨物單位は噸)

自動車はその後益々定期乗合線を増加し、現在では、石塚を中心として、水戸、野口長倉方面は勿論、内原、笠間、鹽子、太田、大宮方面へもそれ

發着があつて交通、運輸の便はこの上なく發達して居ります。

四 風俗

四五十年前は
子供も長袖

昨夜、うちのお父様が、十三参詣まゐりの歸りに、水戸で撮つたといふ古い寫眞を見せて頂いたら、長い袖の着物なのでおどろきました。そのときお父様のおつしやるには、「この頃はみんなかうであつたのだ。そして卒業式のときには、この着物の上へ紋付の羽織を着て行つたことを覚えてゐる。勿論袴ははかなかつた。學校生徒が今のやうに筒袖の着物を着るやうになつたのは、日清戦争の頃からと思ふ。帽子もその頃からポツ／＼かぶる者があつた。しかし、今のやうに一般の生徒が冠るのは大正になつてからかと思ふ。女の子はその頃まで長袖を着て髪を結つてゐた者がいくらかもあつた。それが今では、男女とも洋服を着て靴をはく者が珍しくないやうになつた。」とお話になつた。

わたくしが「成程かはりましたね」といつたら、お父様はにこ／＼しながら、「かういふことは調べておくと、後々の参考になるものだ。お父様

世の中の移り
變りを調べる
こと

が題を出すから一つ調べてみなさい。わからんことは「お手傳もしよう」といひながら私の帳面へ次のやうな題を書いて下さいました。

一、村の小學校へ高等科を設けたのは何年頃か、

はじめの高等科卒業生は何人程あつたか、

一、小學校の校長先生は、開校以來何人かはつたか、

その人の氏名を順に調べてみなさい。

一、義務教育が六年になつたのは何年頃か、

四年制度の頃の學科目は何と何か、

一、村の人で自轉車を乗りはじめたのは何年頃か、

誰のうちで買求めたのが一番早かつたか。

一、村へ電燈のついたのは何年頃か、

私が「ずいぶん面倒なことですね」といつたら、「まあ精出して調べてみるさ」と鉛筆をお返しになりました。

——正雄の日記より——

五 住宅

農家の住宅

私共の家をよくみると、大抵東南に向いてゐて、日當のいゝ庭を前に



石塚町本通り

前を通るのも、側を通るのもある。

してゐる。そして兩側には、物置、肥料舎などを控へてゐる。倉庫のある家では、家の前に少しはなして、戸口をこちらへ向けておく。家の後は、杉の木立か竹林になつてゐて、屋敷の隅には小さな氏神様がある。空地には栗や柿などを植ゑ、なかには葡萄などをつくつておくうちもある。家は一方が廣土間で、茶の間、座敷と順に並んでゐる。なかには裏座敷などのある家もある。そして座敷には廻縁まわりだがあり、内庭を仕切つて低い塀のあるものもある。家の向が東南だから、道は

商家の構造

このあひだ石塚へ行つて、商店を見たら、どの家も必ず道路に面して店がある。だから家の向は一定してゐない。中には冬はどんなにか寒からうと思ふやうな家もあつた。

農家と商家とは、その業態によつてかうもちがうものかをつくづく考へた。

—ある農村の一少年記す—

六 郷土の研究

郷土の研究

つまらぬと思ふことでも少し氣をつけてみると色々面白いことがある。私共は友人と共同して、郷土の研究をすることにした。昨日は、みんなして組分けと研究題目とを次のやうにきめた。

第一組は、村の神社の研究

- 1、神社の創建年代、祭神
- 2、本殿、拜殿の構造、お屋根の葺き方
- 3、鳥居の數、大きさ
- 4、末社の名

第二組は、庚申塔、供養塔、馬力神の觀察

- 1、その名稱と位置
 - 2、建設の時代やその由來
- 第三組は、忠魂碑並に戦病死軍人の墳墓

1、位置、氏名

2、石碑の構造、様式

3、碑面の文字文章

第四組は、地名の研究

- 1、字名(例へば田中、塚本、沼の上)
- 2、橋名(例へば鷹匠橋、御庫橋、新橋)
- 3、坂名(例へば延萬寺坂、萬丈坂)
- 4、沼、淵の名(源介沼、延命淵)

第五組は、古文書の調査

1. 家の系圖、古人の一代記
2. 古き證書類、金錢貸借證、御年貢納帳
3. 諸令達文
4. 明治初年の新聞紙、官報

—ある研究班長の手記—

七 史蹟、名勝、天然記念物

心をとめて観察すると、路傍の一草一木にも學問の種があり、村端の古塚荒地にもそれらの傳説があります。これらのものは一度失はれると、千金を重ねても再び之れを得ることは出来ません。私共は力めてこれが保存愛惜の途を講じなくてはなりません。今、重なる者を左に誌します。中には名のみ残つて跡をとらぬもの、名も形も失はれたものもあります。皆様の力でそれらの研究保存の途を圖つて下さい。

城跡、館址

城跡、館址

古墳、古塚

古墳、古塚

- | | | | | |
|---------|----------|-----------|----------|------|
| 那珂西城址 | 石塚城址 | 御前山城址 | 大山城址 | 高 |
| 久城址 | 孫根城址 | 古内氏館址 | 坏館址 | 平氏が館 |
| (北方) | 土丸の塞(北方) | 神生氏館址(飯富) | お局屋敷(藤井) | 戸田 |
| 宅址(繪山) | 作内館址(石塚) | 立原氏館址(飯富) | 御陣屋址(増井) | |
| 古墳、古塚 | | | | |
| 藤井栗山の古墳 | 増井の古墳 | 上青山の古墳 | 高根の | |
| 古墳 | 北方の古墳 | 北方の首塚、胴塚 | 高久の休塚 | |
| 上入野古墳 | | | | |

墳墓

墳墓

- | | | | |
|------------|-----------------|------------------|-----|
| 眞佛上人の墓 | 江戸小五郎の墓 | 平重盛の墓 | 相應禪 |
| 尼の墓(重盛の奥方) | 平貞能の墓(以上三は小松寺内) | 知空上人の墓(石塚) | 佐竹 |
| 秀義の墓 | 佐竹義敦の墓 | 大光禪師の墓(以上三は清音寺内) | 鯉淵要 |
| 人の墓 | 増子金八の墓(石塚) | 連山和尚の墓(上伊勢畑) | 峨嶺先 |
| 生の墓(上坪) | | | |

原野、河沼

原野、河沼

十萬原 龍潭淵(古内) 相川(伊勢畑) 斧沼(岩根) 赤澤堰(澤山)

光戸川(赤澤)

天然物

天然物

藤内神社の藤 阿波山上神社の大杉 北方諏訪神社の櫻

薬師寺の菩提樹、白檀 小松寺の枝垂櫻 笠の宮の松(小坂神社)

春園の這松(市村某氏方) 伊勢畑の龜石(今御前山道路開通記念碑となる) 御前山の各種

珍木 御前山の櫻林 岩船の山椒魚 岩船の矢の根石

延命淵の河鹿(かじか) 阿波山の一本杉 那珂西の大堀並木

増井の並木

その他

その他由緒ある遺跡としては

孫根の觀世音 昔徳一大師が一夜のうちに觀世音を刻み竣工にのぞみ開眼しようとしたら、惜しくも雞ないて夜があけたといふ。それが爲にこの一部落では今でも雞を飼はぬといひま

す。

飯富の親鸞上人の田植跡 詳しいことは前篇にかきました。

大正年間立派な記念碑が建ちました。

相川温泉 こゝは弘法大師の遺跡と傳へられ、大師の御加持石といふものがあります。

第五郷土の政治

一 沿革

上古、この地方が那賀國造(いづみくにのみやつ)に依つて治められ、後、那賀評となり更に那珂郡となつたことは既に學びました。その當時は郡の下に郷があり、那珂川の兩岸二十二郷の地が所謂那珂郡に屬しました。

その中、日下郷(ひげ)は今の飯富村一帯で、石上郷といふのは石塚町及坪村岩船村西郷村の一部を併せたものであります。そして鹿島郷といつたのは今の古内及び岩船、孫根一帯に亘り、勝見澤増井、藤井は入野郷

那珂郡二十二郷
日下郷、石上郷
鹿島郷
入野郷

阿波郷

に屬してゐました。澤山村、伊勢畑村は坏村の粟と共に阿波郷と呼ばれてゐました。



郷の區分圖

其後、皇政おとろへて武士が地方政治を素すやうになつては郡や郷の稱呼も色々にかはりました。徳川氏になつては、大体今の大字がそれ、一つの村として水戸藩の政治の下に西郡奉行の支配をうけつゝ、名主、庄屋、横目などの村役人に依つて簡

單な自治的制度を持續してきました。

明治の初、廢藩に際して水戸縣の治下となり、更らに茨城縣に入り、村には大區、小區、後には聯合村、戸長役場などの制も出來ましたが、二十一

西郡奉行

年に町村制の發布があり、はじめて今日のやうな町村が形づくられました。石塚町はもと村と呼ばれましたが、大正八年から町の名に依つて呼ばれることになりました。

今、舊村(現在の)の沿革その他の大要を示します。

現在町村名	大字名(舊)	上代の郷名	元祿十五年調査戸数	天保十三年調査畑地積(町)	沿革摘要
飯富村	飯富、岩根、藤井	日下郷、同郷、入野郷	一六五、八六、九七	二〇四、五二、六六、八六、三六	古くは大部、延享元年飯富、元祿九年押切、同十四年岩根
石塚町	石塚、那珂、上泉	石上郷、日下郷、同郷	三三五、二八七、五七	一〇五、六三、一八、七〇、一五、六〇	慶長以後上下二村に分れ、天保中舊に復す
小松村	増上、磯野	入野郷、同郷	一六四、二五〇、四一	一八、五三、九、六六、四、八七	慶長以後上入野、享保五年金伊野、文化中舊に復す
西郷村	上青山、下青山	石上郷、同郷	五七六、三九六	三、六二、三、五	慶長以後上下二村となる

伊勢畑村	澤山村	岩船村	坪村	春園	小坂	勝見	上内	下内
				同	同	同	同	同
下伊勢畑	阿波山	高野	孫久根	栗下	石上郷	阿波郷	同	同
一〇八八	一四七六	七三三	七三三	一〇八八	一六九	八六六	一〇八八	一〇八八
一三三	二六	七	七	一三三	一〇五	一〇五	一〇五	一〇五
四、五	六、七	八、九	一〇、一一	四、五	六、七	八、九	一〇、一一	一〇、一一
もと上下一村であつた	もと上粟、中古大山、天保以後阿波山となる	もと高野、天保より今の名	天保中、観世音を併せる	もと下粟ともいつた	もと石塚と同村なりしといふ	もと野田、宗田、天保中春園慶長中上下に分れ天保舊に復す		

上伊勢畑	同	同	同
二五	二五	二五	二五
三〇	三〇	三〇	三〇
三〇	三〇	三〇	三〇

二 町村一覽

(園は役場の所在地)

町村名	大字名	町村經常費豫算	昭和八年度	昭和九年度	同 教育費豫算	昭和八年度	昭和九年度
飯富村	飯富、岩根、藤井	一六九四七	一八五七六	一〇五四三	一〇九八七		
石塚町	石塚、那珂西、上泉	一三六〇四	一九五九二	一〇五四三	一五九三一		
小松村	上野、増井、磯野	一一一四二	七二五三				
西郷村	上青山、下青山、春園、小坂、勝見澤、上古内、下古内	一八八三三	一九八三六	一一二四五	一三三五六		
坪村	上坪、下坪、栗園	一三五五七	一三二五〇	六八八〇	七一〇八		
岩船村	孫根、高久、北方、錫高野、岩船、高根	一七九三二	一九六九九	一〇九一五	一一六二四		
澤山村	下阿野澤、阿波山、上阿野澤、赤澤	一二八〇八	一三八四五	六八二八	七〇六六		
伊勢畑村	下伊勢畑、上伊勢畑、檜山	一〇一二八	一〇四九二	五九三五	六一五〇		

(石高、地積は大略であります)

自治機關

三 町村の自治

各町村には、それ／＼町村役場をおき、町村長、助役、収入役、書記等の吏員があります。別に町村會の設があり、町村事業計畫や經費豫算の審議をします。外に學務委員、區長等の職もあつて、町村長の職務を補助することになつてをります。これらの職員は、何れもわれ／＼町村民が直接或は間接に選舉することになつてをります。

この外、多くの町村には消防組の設があつて、必要な器械を備へ、縣の任命による組頭、部長以下の組員があり、警防の任に當つて居ります。また町村民が自ら進んで、衛生組合、火防組合、納稅組合等を組織して、それ／＼の仕事をして居る町村もあります。

四 町村にある地方官署

各町村には、巡查駐在所があつて、常にわれ／＼の生命、財産を保護してゐてくれます。石塚町には、警部補派出所の設もあり、水戸警察署に屬して部内の事務の統一を圖つて居ります。

石塚町には、水戸區裁判所石塚出張所があり、主として登記事務を扱つてゐます。

水戸地方專賣局の出張所も石塚にあります。當地方一帯の葉煙草の收納をして居ります。

澤山村阿波山と赤澤とには、水戸營林署の地方擔當官吏が駐在してゐます。そして國有林の管理を掌ります。

郵便局は石塚、飯富、阿波山にあります。石塚局飯富局は、普通郵便の集配をなし、石塚局では此外電報、電話も取扱ひます。

五 明治維新の志士

弘化、嘉永の頃から、慶應、明治にかけて、所謂幕末維新の時代こそ、我が國史を通じて前古未曾有の非常時であ



石塚專賣局出張所

りました。この秋に際して局面の轉換を圖り、皇政維新を促進せんが爲めに、われから進んでその先驅者となり犠牲者となつて、護國の鬼となつた郷土人の多いことはすでに前篇に書きました。

今や祖國日本は、再び國歩艱難の秋を迎へ、皇國精神の高揚を叫ばれる今日、私共はこの先輩の事蹟を顧みて感慨無量に堪えません。いでや、まつ志士の墳墓の草を拓いて、千古香しきその芳名をしのびませう。

一、文久以前の殉難者

殉難年月日	同上場所	住所身分	氏名	年齢
弘化二、四、二〇	江戸獄	下伊勢畑	疋田政平	二八
安政五、正、四	同	同	蓮田東三信成	二二
同 六、八、一八	小金驛	上古内	大坪與八	三七
萬延元、三、三	櫻田門外	同 神官	鯉淵要人 珍陳	五一
同 元、三、一	一	下阿野澤里正	船橋太郎衛門 忠國	五七

文久元、七、一九 駒込邸 錫高野神官 富田謙司 重孝 四一

一、元治甲子役に戦死した者

年月日	場所	住所身分	氏名	年齢
元治元、六、二六	江戸	上青山神官	平賀 貢綱長	二三
同 一〇、一	棚倉	増井郷士	興野健彦 良遠	二五
同 九、二三	湊	上青山同	綿引新四郎 信綱	二八
同 一〇、一九	湊	孫根里正	加藤木 東之介	三〇
同 一〇、二	田彦	阿波山	飯田清吉	二一
同 八、二九	三美	錫高野	鯉淵彌七 正寛	三一
同 八、一	同	同	檜山新藏 則光	四五
同 八、二七	下江戸	同	鯉淵次兵衛 富家	四三
同 九、二八	湊	高根 大山寺	鱗 祥	二六
同 九、一	額田	下古内神官	飯田伊織 義行	
同 一一、二〇	和田峠	上入野小松寺	不動院全海	四二
同 八、二八	金澤	錫高野	島崎勝藏	三五

同	一、一	和田峠	石塚	島長重	四六
?	?	和田峠(?)	阿波山	萩谷久五郎	五六
?	?	同	同	萩谷剛次郎	二六

一、捕へられて斬られた者

年	月	日	場	所	住	所	氏	名	年齢
元治	元	九、二九	奥	川	上古内		西山常藏		三三
			那珂	川	同		清吉		
			小	金	増井		興野眞之介		
同		九、一六	吉	澤	上	坪神官	今瀬織部		四一
					増井		袴塚安三郎		三〇
慶應	元	四、四	小	金	同		興野助九郎		四七
元治	元	一〇、八	後	臺	高	根	平賀久米之介		三〇
同		一二、二四	眞	岡	上古内		鯉淵直衛門		三四
					下古内		田口久米衛門		二八
同		九、六			同		田口庄九郎		二四

一、獄死した者

年	月	日	場	所	住	所	氏	名	年齢
元治	元	一一、二九	水	戸	那珂西神官		安藤造酒之介	信明	六七
慶應	元	一、二三	同		同		薄井喜平		六二
同		五、五	同		飯富		小出才四郎		五一
同		二、八、二六	同		上青山組頭		久保田庄左衛門	政俊	四六
			同		飯富神官		松本隼人		
慶應	元	六、六	關	宿	下伊勢畑		青木源之介		二四
同		六、二一	佃	島	上古内		加藤東七	正直	三七
同		七、四	同		錫高野里正		三村多兵衛	元貞	三三
同		三、二三	川	越	上古内		出澤孝三郎		三三
同		五、四	同		同		出澤喜平次		三四
同		五、二六	佃	島	阿波山		萩谷幸吉	義正	二九
同		一二、一一	同		下阿野澤里正		船橋清七郎	信國	三六
同		一二、五	銚	子	孫根		河田貞介	昌言	二六

同	四、二五	一	下古内組頭	加倉井 金兵衛 政忠	五一
同	七、七	佐	倉	瀧田新左衛門	四五
同	一〇、一	同	下青山郷士	綿引新八郎 經	三三
慶應二、五、一七	佃	島	錫高野	金長總十	二五
同	六、二〇	同	上 坪	高橋藤一郎 信尹	五五
同	六、二四	同	錫高野	横倉源次郎 直正	二六
慶應三、六、一六	關	宿	小 坂	河原井 藤次平 泰徴	四四
同	七、五	同	上青山	川又半七 昌軒	三六
慶應二、六、九	佃	島	錫高野	横倉平衛門 政朝	四〇
同	七、二	同	同	三村親七 親儀	五九
同	一、三〇	同	同	大和田忠太 貞儀	三二
同	六、二二	同	同 組頭	小林清兵衛 友則	六五
同	六、六	同	下阿野澤	船橋藤介	二四
同	五、二	同	小松寺	僧 宥仁	四二
同	二、八	同	寶幢院	僧 範淳	五四

一、武田伊賀に従ひ西上して敦賀で斬られた者

年 月 日	住 所	氏 名	年 齡
慶應元、二、一五	下 坪郷士	高瀬秀之介 忠秀	二一
同	阿波山	大高 要介 忠要	二二
同	飯 富	岡部 仙介 忠郷	
同	高 久	加藤木雄之介 尙義	二四
同	小 坂	中村清之允 忠清	
同	高 久	青山辰二郎	二五
同	北 方	加藤木宗吉 忠宗	二八
同	阿波山	小林 貞七 忠峰	二一

一、明治元年の戦死者

年 月 日	場 所	住 所	氏 名	年 齡
明治元、九、二九	渡 里	飯 富	綿引孝五郎 信道	四七
同	南三の丸	上 坪	大越専介 義直	二一
同	坪	上 坪	添田平八 義忠	四二

一、京都敦賀で殉難

年	月	日	場	所	住	所	氏	名	年齢
慶應	元	二、一五	敦賀	賀増	井松崎	熊藏			二四
同	二、二	一	京都本國寺	小松寺	杉山宗衛門				
同	二、五、二四	同	同	下	坪高瀬忠四郎	敬儀			二九

六 明治以後戦病死殉職の軍人

明治六年、徴兵令が定められ、國民皆兵の制に復し、全國に六鎮臺を置くことゝなつた時、本郡は東京鎮臺に屬しました。その後二十一年鎮臺を師團と改められたとき、本郡は第一師團に屬し、歩兵は佐倉第二聯隊に入營しました。二十九年には近衛師團の管理となりましたが、四十年第十四師團に入り、四十二年歩兵第二聯隊は水戸に移駐することになりました。けれども毎年所要に應じて、近衛、旭川、朝鮮、臺灣等の各聯隊及び飛行隊、戰車隊等の要員として召されるものも尠くはありません。海軍は横須賀鎮守府の所管であります。

鎮臺
師團

我が郷土の壯丁は、このやうにして軍務に服し、明治十年西南の役を手はじめとして、日清、日露の二大戦役、臺灣征伐、シベリヤ事變、濟南事變、近くは滿洲及び上海事變に従軍して、花々しい働きをしました。遂に名譽の戦死を遂げ、百世護國の神として仰がれるに至つたものも澤山あります。その忠魂義魄は近くは明治維新の志士、遠くは奈良朝の防人にも決して劣ることはありません。

戦病死年月	同場所	官等級	勳功	氏名	町村名
明治一〇、四、一九	熊本縣	歩兵		綿引菊次郎	飯富
同 一〇、四、二〇	同	歩兵		鈴木晋次郎	同
同 一〇、四、二九	同	歩兵		青木秋次郎	同
同 一〇、八、一	同	歩兵		増子勘次郎	同
同 三七、一、三	旅	歩上	勳八功七	小坪秋之介	同
同 三七、九、二六	旅	歩	勳八功七	西宮卯之吉	同
同 三七、六、一五	常陸	丸歩		綿引冬吉	同
同 三八、二、五	旅	順輜	勳八	小坪己之吉	同

大正六、一、二四	軍艦筑波	一水	勳八	大津勇之介	同
同九、五、二四	ニコライフスク	歩上	勳八功七	富永信名	同
昭和七、六、二五	滿洲	工上	勳八功七	梶山忠次	同
明治二八、九、一三	台	輸卒		森島西之介	石塚町
同三七、一、三〇	旅	歩軍	勳七功七	岡崎東太郎	同
同三七、八、三〇	同	歩一	勳八	寺門龜太郎	同
同三七、一、二六	同	歩一	勳八	飛田勝吉	同
同三八、三、九	田義屯	歩二	勳八功七	萩谷常松	同
同三六、五、二八	伊勢海	四水		田口金次郎	同
同三七、一〇、二七	旅	歩上	勳八功七	桐原三郎平	同
大正八、七、二六	シベリヤ	砲上	勳八功七	岡崎四郎	同
同九、三、一三	ニコライフスク	歩上	勳八功七	森島喜代之介	同
同	同	歩伍	勳八功七	須藤一二	同
昭和七、二、三一	張維屯	工上		淺野朝之介	同
明治一〇、二、〇〇	熊本縣	歩伍		興野寅五郎	小松村
同二〇、二、二八	同			興野七三郎	同

同三七、一〇、二六	旅	歩二	勳八	綿引卯之太郎	同
同三七、二、一	同	歩一	勳八	笹島彦之介	同
同三八、一、二五	遼陽	歩上	勳八	飯村丑松	同
同三八、一〇、二七	鐵嶺	輸卒		松崎卯三郎	同
大正九、五、二五	ニコライフスク	歩上	勳八功七	綿引信二	同
明治一〇、四、一七	熊本縣			加倉井源次郎	西郷村
同三八、四、二八	旅	歩曹長	勳七功七	加藤哲	同
同三八、一〇、一〇	陸軍病院	歩二	勳八	高部正太郎	同
同三七、一〇、二七	旅	歩一	勳八功七	綿引秋次郎	同
同三七、八、二六	大西溝	歩上	勳八	小林子之松	同
同三七、九、二二	陸軍病院	歩上	勳八	大津定	同
大正二、二、三一	軍艦橋立	一機		小瀧延彦	同
明治二九、七、二二	台	歩二		加藤菊太郎	同
大正九、三、一三	ニコライフスク	歩上	勳八功七	田口吉廣	同
同	同	同	勳八功七	綿引弘藏	同
同	同	同		大津弘	同

明治一〇、四、二〇	熊本縣				小泉卯之吉	坪村
同一〇、四、一	同				鯉淵山藏	同
同三七、一〇、二九	旅順	歩上	勤八		廣木小左衛門	同
同三八、三、七	唐家屯	歩一	勤八功七		寺山子之吉	同
同三八、八、一〇	野戰病院	歩一	勤八功七		加倉井辰之允	同
大正八、一二、一四	シベリヤ	工伍	勤八		土井美雄	同
昭和七、二〇、二二	滿洲	歩上	勤八功七		今瀬藤五郎	同
明治一〇、一二、三〇	熊本縣	歩伍			武井留次郎	岩船村
同二八、六、九	佐倉病院	歩二			山崎竹次郎	同
同三七、一〇、三〇	旅順	工上	勤八功七		田口常之介	同
同三七、一〇、三〇	同	歩上	勤八功七		石井清次郎	同
同三九、九、一〇	奉天病院	歩上	勤八		秋山兼吉	同
同四二、九、六	習志野病院	騎			小林七之介	同
大正七、三、一〇	千葉病院	工上			小堀壽敬	同
同九、一〇、二〇	東京	歩伍	勤七		小林藤市	同
同一三、九、一六	羅南病院	歩			平賀英夫	同

昭和七、二〇、八	滿洲	歩上	勤八功七		三村信明	同
明治三七、八、二六	大西溝	歩上	勤八功七		所 武次郎	澤山村
同三八、一、二五	黒溝台	歩一	勤八		所 西次郎	同
同三八、三、八	田義屯	歩一	勤八		所 直彦	同
同四一、九、三	韓 國	憲上	勤八		梅原平太郎	同
大正九、三、一三	ニコライフスク	歩曹長	勤七功七		廣木義夫	同
同	同	歩上	勤八功七		所 次八郎	同
明治三七、九、八	大阪病院	歩一	勤八功七		青木常彦	伊勢畑村
同三八、二、九	田義屯	歩一	勤八		青木朋彦	同
同三八、三、二一	旭川病院	歩二			瀧田竹之介	同
大正九、四、六	シベリヤ	歩伍			檜山秀一郎	同

明治天皇御製 昔よりためしまれなる戦におほくの人をうしなひしかな
 萬代も史よみの上にぞのこさせむ國につくし、臣の子の名は

七 忠魂碑

松原神社

鎮靈社

常磐原

靖國神社

忠魂碑

以上かゝげました維新殉難の志士及び明治以後戦病死軍人は何れも國家の干城、皇國の鎮^{ちん}めてあります。越前國敦賀港外の松原神社は、即ちこの地で幕府の刑^{けい}及^{じつ}をうけた三百五十餘名の英靈を祀る社であります。水戸常磐神社境内の鎮靈社は本縣出身の殉難志士軍人の御魂をまつる社であります。常磐原共同墓地には各地に於て難にたふれた維新の志士の墓地があります。最近改修せられ忠魂塔も建てられて一段その莊嚴を加へました。郷土各町村にはそれ^{ごと}く各個人の墓地があり、家人は勿論村人の崇敬^{すけい}供養^{くよう}をうけてゐるのはいふまでもありません。

そしてこれらすべての人の大部分は、かしこくも靖國神社に合祀仰出されて、國家の祭祀をうけて居ります。

この外、各町村に於ては、在郷軍人分會その他の人々の力に依つて忠魂碑の建てられてをる所が少くありません。今、既設の分について表記すれば次の通りであります。

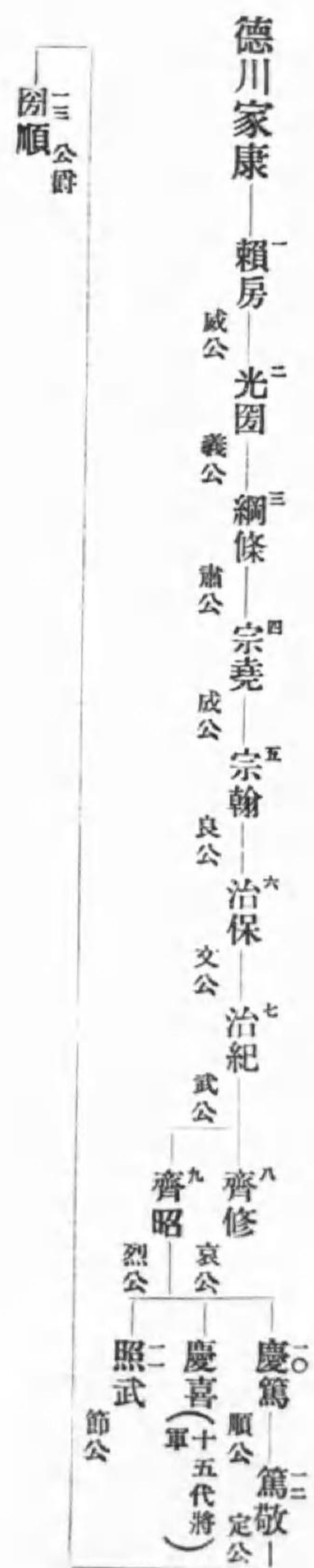
町村名	所	在	碑	面	筆	者	備	考
飯富村	大字飯富役場附近	忠	魂	碑	大將	福島安正		
石塚町	薬師寺境内	忠	魂	碑	大將	福島安正	高臺共一丈四尺八寸 六尺六寸	
小松村	小松寺門前	忠	魂	碑	元帥	川村景明	高一丈二尺五寸 四尺五寸	
西郷村	青山神社前	忠	魂	碑	中將	田中義一	高一丈 四尺五寸	
澤山村	白山神社前	木	標	腐	朽	先に建てなほす		

三世相關 人は三世に亘りて生活す、即ち過去、現在、未來である。詳に言へば現在は過去の爲めにつながれ、將來は現在によりてつながる。吾人の幸福は祖先の惠澤にして、吾人の努力は子孫の爲である。現在は現在に因りての現在であると共に、又た將來の爲めの現在であり、過去の賜に依る現在である。故にこの賜の總てに更らに吾人の勞作の結果を添附して、之を將來に引渡さねばならぬ。

——徳富蘇峯氏

城北郷土讀本終

德川氏略系



郷土史年表

天皇	紀元	年	號	史	實	摘	要	備	考
神代									
神代									
神代									
崇神									
成務	七九五								
應神									
孝德	一三〇六								
文武	一三六〇								
同	一三六一								
同	一三六二								
同	一三六八								
同	一三七三								
同	一三八一								
元正	一三八四								
聖武	一四〇五								
同	一四二八								
同	一四三二								
仁德									
光									

少彦名命、今の阿波山上神社の境内に御姿を現し給ふ
建御雷命、今の古内その他郷土内各地に跡をとどめ給ふ
天鳥船命、今の岩船に於て賊を討ち給ふ
建借間命、東夷の荒賊を平ぐ
那賀國造をおく
茨城國造をおく、常道の名この頃より起る
國造を廢して評を置く
常陸の名はじめて定る
阿波山上神社創建
評を改めて郡となす、わが郷土すべて那賀郡に屬す
高房神社創建
常陸風土記撰進
藤内神社たつ
郡の下に郷をたてらる。二十二郷の地那賀郡となる
僧行基今の小松寺の地に來ると傳へらる
三枝祇神社たつ
青山神社たつ

大寶律令頒布
和銅三年都を奈良にさだめらる

天平十九年奈良の大佛を鑄はじむ
和氣清麿神教を奏す

○縣 會 議 員

佐藤節三(石塚町)

○水戸區裁判所石塚出張所

石堂秀彦(石塚町)

○水戸地方專賣局石塚出張所

飛田留三(石塚町)

所員 青木

堀江德之允

館野

澤重任

關野

鈴木倉吉

道正

○水戸營林署澤山村駐在官吏

名取楠實(赤澤)

井上光夫(阿波山)

○東茨城郡教育會北部教育會

會長 島光之介(西郷)

副會長 中島忠吉(石塚)

評議員 各小學校長

昭和九年十月七日印刷
昭和九年十月十日發行

城北郷土讀本
定價金貳拾五錢

著作兼發行者
茨城縣東茨城郡北部教育會

茨城縣東茨城郡西郷尋常高等小學校

代表者 島 光之介

水戸市南三ノ丸一〇七ノ二

印刷者 柴 博

水戸市南三ノ丸一〇七ノ二

印刷所 柴 印刷所

電話四三〇番

版權所有
東茨城郡北部教育會

終

